
名探偵・スウと篠子の事件簿

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵・スウと篠子の事件簿

【ZPDF】

Z8393A

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

高校生探偵・明日岡スウと浜谷篠子が、仲間達とともにさまざまな難事件を解決していく。

FILE01・波乱の高校生活の始まり

オレの名前は明日^{あすおか}四^よスウ。

少しは名の知れた探偵だ。

オレは今、大阪の柏大学付属高等学校に通っている。

小中高大一貫教育の、私立の学校だ。

「あーあ、かつたりい・・・高校まで行くのって、ダルいよ、まつたく・・・」

「文句言わないの、スウ！」

オレをたしなめたこの女の名前は、浜谷^{はまや}篤子^{あつこ}。

オレの幼なじみで、大切な恋人だ。

「篤子はダルくないのかよ？」

「確かに、高校生活は大変だよ。でも、スウと一緒に学校行けるから、辛い気持ちも吹き飛んじゃうんだ。」

「・・・ったく、恥ずかしいじゃねえかよ・・・」

オレと篤子は、現在柏田マンションに住んで、そこから学校に通っている。

というのも、オレ達は小学校の頃から柏高校に通っていて、家が遠いためにお互いの両親に許可をもらつて、マンション暮らしをしているのだ。

そのため、オレ達の事を知つてゐる親友達からは、すでに夫婦扱いされている。

「スウ、いよいよ高校生活スタートだね。」

「ああ、気合い入れていくぜ、篤子。」

「うん！」

オレと篤子は、手をつけないで学校に走つていった。

「やつたあー、スウとクラス一緒にだー！」

篠子は、クラス分けの表を見て、はしゃいでいる。

「そんなに喜ぶ事か？」

「うん！ だって、スウとは9年間、一度も離れ離れになつてないんだもん！」

「ある意味、奇跡に近いよな・・・」

オレと篠子は、1-1Qの教室へと急いだ。

そしてこれこそ、オレ達2人の波乱の高校生活の始まりだったのだ。

FILE02・謎めいた3人のクラスメート

オレと篠子は、1-Qの教室の扉をくぐった。

「・・・なんか、緊張するね、スウ・・・」

「そうだな。」

篠子に比べると、オレは少しばかりこういう状況に慣れている。
「それでも、変だよね。」

「何がだ？」

「だって、中学校までは、『1-1』『1-2』『1-3』ってクラス分けされてたじゃない。なのに、どうして高校になって、『1-A』『1-B』『1-C』ってクラス分けになるの？」

篠子の疑問ももつともである。

だがオレは、その理由がわかつていた。

「ああ、おそらくそれはだな・・・」

「こ」のクラス分けは、将来なりたい職業別にクラス分けされているんだよ。」

オレが篠子に説明する前に、メガネをかけた角刈りの少年が、パソコンをいじりながら答えた。

「・・・オマエ、誰だ？」

するとその少年は、フツと笑った。

「血口紹介が遅れたね。ボクの名前は笠美雄也。かさみ ゆうや 笠美財閥の御曹司だ。」

「ああ、あのゲームメーカーの息子だな？」

「そういう事。」

笠美雄也は、フフツと笑った。

「ところで、君達の名前は？」

「オレは明日岡スウだ。」

「アタシは浜谷篠子よ。」

「『神童』と呼ばれ、日本警察でも手に負えない難事件を次々に解

決してきた、IQ測定不能の名探偵のカッフル・・・小生のメモにはそう記録されている。」

不意にオレ達の後ろから、1人の少年が現れた。

「ああ、失礼。小生は畠中葉平^{はたなか ようへい}。以後、お見知り置きを。」

畠中葉平は、丁寧にお辞儀をした。

「メモ魔つてワケか。じゃあ、クラス分けの表全部メモつてある?

あつたら教えてほしいんだけど。」

「ちょっと待つて、それは・・・」

「1 - A B C D E F G、H I J K L M N、O P Q R S T U、V W X
Y Z ・ ・ ・ 一年から三年まで共通。すべて職業別に振り分けられた
クラス。あ、ウチは青木雅子。よろしうにな、明日岡スウ君、浜
谷篤子ちゃん、笠美雄也君、そして畠中葉平君。」

青木雅子という少女は、クスリと笑った。

F-1-E03・資格を『えられた者達のクラス

青木正子は、クスリと笑っていた。

「篠子、ちょっと来い。」

オレはそう言うと、篠子の手を引っ張った。

「キヤ！」

オレは篠子を廊下へと連れ出した。

「ど、どうしたの？スウ・・・」

「篠子、よく聞けよ。笠美雄也、畠中葉平、そして青木正子・・・

「イツらは、それぞれの部門のエキスパートだ。」

「え？え？」

篠子は、何が何だかわからないらしい。

「まず笠美雄也だが、『イツは某有名企業、笠美財閥の御曹司だ。愛用のパソコンで、いろいろな情報を得ている。次の畠中葉平は、メモリング、つまり記録のプロ。そして最後の青木雅子は、瞬間記憶の能力者だ。』

「し、瞬間記憶！？」

「ああ、一度見たものは二度と忘れない。便利でもあるし、やつかりな能力ちからもある。」

オレは一拍おいて、話を続けた。

「あの3人がそれぞれ持つ特技・・・それらはすべて、ある職業に必須の力だ・・・何なのか、わかるか？」

「探偵・・・ね。」

「そうだ。おそらくこのクラスの創設者が、伝説の名探偵なのだろ？つまりこのクラスの『Q』の意味は・・・」

オレは、静かに答えた。

「『クオリファイド（Qualified）』・・・つまりこのQ

クラスは、『資格を与えられし者』のクラスってワケだ・・・」

「じゃあ、アタシ達がこのクラスに選ばれたのも・・・」

「そうだ。オレ達2人も、あの3人と同じく、探偵にふさわしい能

力を持つていたからだ・・・」

オレは篠子の手をにぎり、Qクラスのドアを開けて戻つていった。

オレと篠子が教室に戻った時、ほぼ同時に担任と思われる男が入ってきた。

「全員、着席！」

オレ達は、それぞれの席に座った。

オレと篠子は隣どうし、笠美はオレの左隣、畠中はオレの前、青木は篠子の前になつた。

「オレがオマエ達の担任をする事になった、かるいさわみやび 軽井沢雅だ。今年一年間、オマエ達と楽しく過ごせたらと思っている。では、まず簡単に出席をとつておく。藍沢、赤城、朝霧・・・あしたおか・・・」

「先生、オレは『あすおか』っていうんです。」

オレは即、反応した。

「ス、スマン・・・『あすおか』か。メモしておこう。次は麻生、斑鳩、宇佐美、榎本、小倉、刑部・・・」

軽井沢の声が止まつた。

「次は、かさび・・・」

「先生、『かさみ』です。」

「スマン、『かさみ』か・・・でも、次からは読みそうだ。北浦、久米、越路、近藤、瀬戸川、曾我、滝沢、戸越、丹羽、能代、萩原、はたけなか・・・」

「『はたなか』です。」

「スマン・・・穂波、松平、御堂、柳葉、吉沢。よーし、今呼んだ中でいないヤツは返事しろ！」

「いないヤツが返事できるワケないだろ・・・」

「あの先生、アホやな・・・」

「シッ、聞こえるよ！」

「次は女子だ。浅井、綾小路、五十嵐、宇津木、江戸川、あおき・・・」

・

「ウチ、『おおぞ』つていうんです。ホラ、阪神電車の駅の・・・
「ああ、青木駅の『青木』か。メモしておく。次からは止まる事は
なさそうだ。木ノ下、楠本、工藤、小嶋、真田、酒々井、水郷、妹
尾、伊達、田谷、遠山、中森、一階堂、野上、灰原、服部、はまた
に・・・」

「『はまや』です・・・」

「スマン・・・浜谷、水戸、毛利、山内、湯江、吉田・・・よし、
全員いるみたいだな。では、廊下に整列！！」

FILE05：入学式、そして始まり

オレ達は、軽井沢雅に連れられ、体育館までやつて來た。そこにはすでに、他クラスの新入生達が集合していた。

校長先生が、新入生の名前を読み上げ始めた。

次々に名前が呼ばれ、オレ達のクラスまで回ってきた。

まずはオレ達男子組だ。

「藍沢桜。」

「はい！」

「赤城秀一。」

「はい！」

「朝霧哀。」

「はい！」

「明日岡スウ。」

「はい！」

麻生、斑鳩、宇佐美、榎本、小倉、刑部ときて、次は笠美だ。
「笠美雄也。」

「はい！」

続いて北浦、久米、越路、近藤、瀬戸川、曾我、滝沢、戸越、丹羽、能代、萩原と次々に名前が呼ばれ、次は烟中の番だ。

「烟中葉平。」

「はい！」

穂波、松平、御堂、柳葉、吉沢といって、オレ達男子は終わった。

次は篠子達女子組だ。

「浅井成美。」

「はい！」

「綾小路梨華。」

「はい！」

「五十嵐早紀。」

「はい！」

「宇津木遙。」

「はい！」

「江戸川小波。」

「はい！」

「青木雅子。」

「はい！」

その後、木ノ下、楠本、工藤、小嶋、真田、酒々井、水郷、妹尾、伊達、円谷、遠山、一階堂、中森、野上、灰原、服部と名前が呼ばれた。

次はいよいよ篠子の番だ。

「浜谷篠子。」

「はい！」

それから、水戸、毛利、山内、湯江、吉田と呼ばれて、全員が終わった。

その後、校長先生の話が始まった。

「この度は、我が柏大学付属高等学校に諸君らが入学された事、まことにめでたく思います。して、最近の経済事情は・・・」

話が長いので、省略する。

そして、教室に戻ったオレ達の、いよいよ自己紹介が始まるのだった。

FILE06・自己紹介は何かの始まり?『1』

教室に戻つたオレ達には、いよいよ自己紹介が待つてゐる。

「それじゃ、順番に自己紹介をしてもらおう。まずは藍沢桜!」

「はい!」

藍沢桜が、前に出てきた。

「愛媛第一中学校から来ました、藍沢桜です。実家が果樹園なので、果物に関しては少し知識があります。皆さん、仲良くしてくださいね。」

いい自己紹介だ。

暖かい拍手が上がつた。

「次は、赤城秀一!」

「はい!」

赤城秀一が前に出た。

「横浜東校から来ました、赤城秀一です。サッカーには自信があります。よろしく。」

これも悪くない。

次は朝霧哀だ。

「自分は朝霧哀。それ以上でも、それ以下でもない。」

朝霧は、静かに席に着いた。

「じゃあ、次は明日岡スウ!頼むぞ!」

「はい。」

オレの番が来た。

「柏大学付属中から上がつてきた、明日岡スウです。皆さんよりも若干この学校の事がわかりますが、そんな事は抜きにして仲良くやつていきたいです。あと・・・皆さんお気づきだと思いますが、このクラスは他のクラスとは少し違います。」

「違つて、どう違うんですか?」

ショートの女の子が手を上げた。

「えーっと、君は？」

「湯江朝美です。」

「湯江さんだね。では、今から説明しますが、この高等部のクラス分けは、数字ではなく英語になっています。なぜかわかりますか？」
オレは質問を投げかける。

みんな首を横に振った。

「わかりませんか。この高等部は、将来なりたい職業別にクラス分けされているんです。例えばDなら『ドクター』。医者です。そしてこのクラスは、Q。この意味は『クオリファイド』。『資格を与えられた者』という意味です。このクラスの設立者は、おそらく探偵・・・ボク達がこのクラスに選ばれた以上、Qクラスとしてほこりを持つて、勉学に勤しんでいきましょう。終わります。」
この自己紹介は効いたようだ。

全員から暖かい拍手が上がっている。

オレは、篠子にピースサインでウインクする。
篠子は、とてもうれしそうな顔をしていた・・・

FILE07・自己紹介は何かの始まり?『2』

オレ達男子の自己紹介は全部終わつた。

次は篤子達女子の番だ。

浅井成美の自己紹介が終わり、順番が綾小路梨華まで廻つてきた。

「東京の天ノ下第一中学校から来ました、綾小路梨華ですわ。いずれ、このクラスの中心的存在になつていくと思いますが、皆さんよろしくお願ひしますわ。」

「流石は『天下一』だな・・・」

「『天下一』?」

「天ノ下第一、略して『天下一』だ。あそこにはああいうのが多いんだつて・・・」

「へえ・・・(まるで雨宮だな・・・)」

笠美の言葉に、スウは中等部の時の雨宮マヤの事を思い出していた。彼女も、こんな高飛車な性格の女だつた。

「ああいうの、気に入らないな・・・」

雅子の目つきが鋭くなつていた。

五十嵐早紀、宇津木遙、江戸川小波と続いて・・・

「次は・・・青木!ちゃんと覚えたぞ!!--」

青木雅子まで順番が回つてきた。

「京都の嵐山第一中学校から来ました、青木雅子です。ウチは、権力を笠に着る者、弱者をいたぶる者、他人を見下す者・・・そういう曲がったヤツらが大つ嫌いです!!ウチは真っ向から向かっていくつもりなんで、覚悟しといてください!!!--」

辺りの空気が重くなり、みんな静かになつた。

綾小路梨華は唇を噛んでいた。

雅子は彼女をひとにらみすると、席に着いた。

「へー、けつこう正義感が強いんだな。」

「ウチは、ああいうんが大嫌いやからな!」

しばらくして、順番が篠子まで廻ってきた。

「柏大学付属中から上がってきた、浜谷篠子です。皆さん、よろしく。

みんなの顔つきが変わった。

それはそうだ。

この学校自体から上がってきたのは、オレと篠子の2人だけだからな・・・

妙な事を聞かれない事を祈りう。

オレは、そう思った。

FILE07：自己紹介は何かの始まり？『2』（後書き）

1年O組 全生徒紹介

男子

藍沢桜 愛媛第一中学校
赤城秀一 横浜東中学校
朝霧哀 小倉橋中学校

明日岡スウ 大阪柏大学付属中学校
麻生秀樹 大阪春日野中学校
斑鳩昌人 大阪春日野中学校
宇佐美直紀 秋田白銀中学校

小倉健一
刑部俊也
榎本鈴 広島原島中学校

北浦慎吾 秋田白銀中学校
久米光一 大阪春日野中学校
笠美雄也 秋田白銀中学校
越路快斗 秋田白銀中学校

近藤善太 沖縄合谷第四中学校
滝沢義経 兵庫昇明倫中学校
戸越勇一 東京天ノ下第一中学校

曾我正樹 濑戸川煉 兵庫昇明倫中学校
丹羽京介 東京天ノ下第一中学校

能代菊 沖縄合谷第四中学校
和歌山柑橘中学校

畠中葉平 萩原録郎 東京天ノ下第三中学校
兵庫昇明倫中学校

穂波北斗
まつなみほくと
松平健三
まつだいけんぞう
御堂和馬
みどうかずま
柳葉紅葉
やなぎばもみじ
吉沢一生
よしざわいっせい

沖縄合谷第四中学校
とうきょうあいがやしほつしきちゅうがっこう
北海道網走第七中学校
ほっかいどうあたまししちしきちゅうがっこう
東京天ノ下第一中学校
とうきょうあまのしただいしきちゅうがっこう
北海道網走第七中学校
ほっかいどうあたまししちしきちゅうがっこう
東京天ノ下第二中学校
とうきょうあまのしただいにしきちゅうがっこう
北海道網走第七中学校
ほっかいどうあたまししちしきちゅうがっこう

女子

長野鐘蟻中学校

浅井成美
あさいなるみ
綾小路梨華
あやのこうじりか

五十嵐早紀
いがらし さき

宇津木遙
うづき はるか

江戸川小波
えどがわ こなみ

青木正子
あおき まさこ

木之下洋子
きのした ようこ

小嶋素子
こじま すみ子

水郷香澄
すいごう かすみ

妹尾香子
せのおきよ香子

円谷睦美
つぶらや むつみ

伊達正宗
だて まさむね

工藤新美
くどう にみ

楠本ジエミー
くすもと じえみー

長崎蓮天望中学校
ながさきれんてんぼうちゅうがっこう

東京帝丹中学校
とうきょうていでんちゅうがっこう

東京天ノ下第一中学校
とうきょうあまのしただいしきちゅうがっこう
東京帝丹中学校
とうきょうていでんちゅうがっこう
東京天ノ下第三中学校
とうきょうあまのしただいさんしきちゅうがっこう
東京帝丹中学校
とうきょうていでんちゅうがっこう
東京天ノ下第二中学校
とうきょうあまのしただいにしきちゅうがっこう
東京帝丹中学校
とうきょうていでんちゅうがっこう
北天下茶屋第一中学校
ほくてんかぢゃやだいしきちゅうがっこう
北天下茶屋第一中学校
ほくてんかぢゃやだいしきちゅうがっこう
北天下茶屋第一中学校
ほくてんかぢゃやだいしきちゅうがっこう
北天下茶屋第一中学校
ほくてんかぢゃやだいしきちゅうがっこう
北天下茶屋第一中学校
ほくてんかぢゃやだいしきちゅうがっこう

浜谷篤子

大阪柏大学付属中学校

水戸茜

長崎蓮天望中学校

毛利アソン

東京帝丹中学校

湯江朝美

北天下茶屋第一中学校

吉田真弓

長崎蓮天望中学校

山内千代

東京帝丹中学校

担任
軽井沢雅

FILE08・1-1個のグループ分け

休み時間になると、やつぱりクラスメート達がオレと篤子に話しかけてきた。

質問される事といえば、おそらくはアレ意外にはない。

オレと篤子の関係をだ。

「なあ、明日岡と浜谷さんってどんな関係なんだ？」

「幼稚園の時からずっと一緒に学校の幼なじみだ。」

「浜谷さんって彼氏いんの？」

「いるよ。スウなんだ。」

「へー、幼なじみで両想いのカップルか・・・」

「なんか、憧れちゃうな・・・」

そういうモンなのだろうか？

幼なじみカップルというのは、みんなの憧れなのだろうか？

オレにはよくわからないが。

そんなこんなであつという間に休み時間は終わり、軽井沢雅が教室に戻ってきた。

「みんな、席に着けーーー！」

オレ達は慌ただしく席に着いた。

「えー、今日は特別活動を行う。5人ずつで一つのグループを作ってくれ。」

オレは即、篤子を誘った。

その後、笠美、畠中、青木もやって來た。

他のヤツらも次々とグループを作っていく中、朝霧哀だけが1人ボツンと席にいる。

心細いのだろうか？

それとも引っ込み思案？

何にせよ、1人にしておくワケにはいかないだろうな。

オレ達は、朝霧の席に歩いていった。

「朝霧君。」

「ん？」

「小生達とグループを組みませんか？」

「オレなんかでいいのか？」

「ああ、もちろん。」

「大歓迎や！！」

「し、しかしオレは・・・」

「つべこべ言わずには、さつさとこっち来い。」

そう言って、オレ達は朝霧を引っ張ると、席を6つくつつけ、それ

ぞれ着席した。

こうして、5人×10 + オレ達6人の、計11グループができあがつた。

FILE08・11個のグループ分け（後書き）

登場人物説明その01

名前 藍沢桜

年齢 15歳

誕生日 8月23日

実家が果樹園という、植物に詳しい男。

食堂のメニューの材料は、ほとんど彼の実家から仕入れている。

オレ達は、軽井沢雅の指示により、5人ずつの計11グループ（オレ達は6人）に分けられた。

「えー、このクラスは明日岡が説明してくれた通り、将来探偵志望の者達を集めたクラスである。したがって、これから先オマエ達が遭遇するさまざまな事件は、今分けた11グループそれぞれで解決していく事となる。それでは、グループごとにチーム名を発表しろ！…」

真っ先に手を上げたのが、綾小路梨華だつた。

「『綾小路梨華とその下部達』ですわ。オーホッホッホッ…！」

よくよく見れば、綾小路のチームは彼女以外全員男子である。

「アホか…」

「バカね…」

オレと篤子は、心中でそう思つていた。

そんな事はさておき…

他のみんなも、次々にグループ名を発表していく。

中には、明らかに某有名少女マンガや推理マンガの受け売りだと思われる名前もあつた。

そんなこんなで、いよいよオレ達のチーム名発表まで、あと1チームと迫つたのだが…

オレは大変な事に気がついた。

まだ誰も、ウチのチーム名を考えていなかつたのだ…！

「次…！」

あああああ～！！

ついに来てしまつた…

まだ何も考えてねえよ…

どうする？

教卓の前に6人立つたのはいいものの、篠子も笠美も畠中も青木も、さらに朝靄でさえ緊張でカツチーンと固まってしまっている。

どないすんねん、おい！！

つい、関西弁が出てしまった。

あ～、ちくしょう！！

こうなつたら、あれだ！！

「ボク達のチーム名は『柏少年探偵団』です。」

あああああ～！！

言っちまつたよ・・・

終わつた・・・

と思つたら・・・

クラス全体から、暖かい拍手が起こつた。

そしてこの時こそ、のちに柏大学付属高校を救う事になる、柏少年探偵団誕生の歴史的瞬間であった・・・

FILE10・疑惑の朝霧哀！？

「じゃあ、本日はここまで！探偵はいつ事件に遭遇するかわからんぞ。気を引き締めておけ！」

「はーい！」

「それでは、解散！－」

そして、下校の時間になつた。

「スウ、スゴかつたよ！あんないい名前、よく思いついたねー！」

「あ、ああ・・・あればたまたま・・・」

「たまたまにしては、なかなかよかつたと思ひますよ？」

「そやね！」

「だな！」

「そういうや、最近物騒な事件が増えたなあ・・・」

「うん、ネットでさんざん叩かれて、挙げ句の果てに人殺しちゃつた人とかいるってニュースで聞いたよ。」

「小生ね、思うんですけど・・・叩く方も悪いと思うんですが、それに逆上して殺人を犯す人はもつと愚かだと思つんですね。」

「そやね、けつきょくケンカ両成敗やろ・・・」

「オレは、ちがうと思うんだ・・・どんなに理由があろうとも、人を殺めるのは悪い事だと思つてる。だからこそ、オレ達が事件を解き明かさなきやいけないつて思つよ。」

「うん、スウの言つ通りだよー。」

「同感！－」

笠美、畠中、青木が、同時に返事をする。

スウは、少し微笑んだ。

「そういや、朝霧はどうした？」

「そりいえば、授業が終わった後そそくかと帰つちやつたけど・・・

「なーんか、怪しいな・・・」

「ヤツの事、少し探つてみないか?」

「課外授業つてワケですね。小生は賛成ですよ。」

「ウチも!」

「そんじゅ、そろそろコイツの出番だな。」

スウはそう言つて、一冊の本をカバンから出した。

「コイツはオレのじいちゃんが昔作つてくれた、本型追跡装置だ。アイツの事が気になつて、今日アイツを引っ張つた時にビー玉型発信機をズボンに入れといたんだ。」

スウは本型追跡装置を開き、スイッチを入れた。

ピポッ・・・

「ここから5キロ先の廃墟病院にいるな・・・」

「じゃあ、早くそこに行こう!」

篠子達は、次々に走り出していく。

スウは少しだけ不安を感じながら、篠子達の後を追つた・・・

「さて、目的地には着いたが……どう風に行く?」「やつぱり、別れて捜査した方がええんとしかやう?」

「そうだな、じゃあボクは先に行くよ。」「そう言うと、笠美が真っ先に消えた。

「お、おい、笠美!!」

「それで?君はどうするのです?青木君。」「ウチ一人じゃ、怖い……」

「じゃあ、小生がご同行いたしましょう。明日岡君、そちらは頼みましたよ。」「あ、ああ……」

そして、畠中と青木も消えた。

「……」

「ほら、スウ!アタシ達も行こうよ。」

「あ、ああ……そうだな……」

スウと篠子は、病院の中へと入つていった。

「う、薄気味悪いね……」

篠子はさつきから、スウにしがみついたままだ。

「つたく……怖いんなら外で待つてりやよかつたのに……」「1人になつたら、余計に怖いよ!!」

「あまり大声出すなよ。他に人がいたらどうすんだ……・・・と、その時……

「うわああああああああ!!」「何!?今……」

「笠美だ!!行くぞ、篠子!!」

スウと篠子は、走り出した。

「あ、明日岡君！」

「篠子ちゃんも一緒か！」

「畠中、青木！」

「笠美君は・・・？」

「どこにもいないんですよ・・・」

「ウチらが叫び声を聞きつけてきたら、ここにこれが・・・」

そう言つて、青木はその何かを拾い上げた。

「お、おいそれ・・・笠美がかけてたメガネじやねえか！！」

「笠美君、どこに消えたの・・・？」

スウ達は、しばらく立ちつくした・・・

スウは笠美が消える直前までかけていたメガネをつかみ、歯ぎしりした。

「笠美君、いつたいどこに消えたの・・・？」

「今の段階では、まだ何とも言えませんね・・・」

「とにかく、ここから先は2人で行動するしかない。篠子、オレから離れるな。」

「うん。」

「青木さんも、小生から離れないよう。」

「わかった。」

「じゃあ、また後で落ち合おうぜ。」

「無事に再会できる事を祈ります。」

「じゃあね。」

畠中と青木は、そのまま走つていった。

「ねえ、スウ・・・」

「ん？」

「笠美君、無事だよね？」

「あつたり前だろ！そんな簡単に人が消えてたまるか！？」

「そうだよね・・・」

「笠美もそうだが、朝霧の行方もまだつかめてない・・・」

「いつたい、どこにいるんだろうね。」

すると、その時・・・

「うわあああっ・・・」

「キャアアアッ・・・」

遠くから悲鳴が聞こえてきた。

「今の、畠中君と雅子ちゃん……」

「や、やられた！！」

スウと篠子は走り出した。

「畠中のクツ……」

「雅子ちゃんのもあるよ……」

「くそつ……」

スウは拳を床に打ちつけた。

「チクショウ……」

「とうとう、アタシ達2人だけになっちゃったね……」

「ああ……篠子。絶対に……オレから離れるな。」

「うん……わかった……」

スウは篠子の腕をつかみ、足早に走り出した。

その後ろで、何者かが密かに彼ら2人を監視していた……

「笠美に続いて、畠中と青木まで消えた・・・篠子・・・これから元は、

先は、絶対にオレの手を放すなよ！」

「うん……わかってる……でも……もし危ない目にあつたら

卷之二十一

「大丈夫だつて！何かあつたら……」

「アハ！ パタシ 心酔なんぢ

卷之三

「アタシが、スカの心配ばかりしている間に、お嬢さんはどうなったんだ？」

「つたぐ・・・そういう恥ずかしい事平氣で言つなよな・・・」

「ウフフ」

その時、ヒンヤリと冷たい空気が流れてきた。

「…懶…」…の声で、行きたくなつたやつた。

卷之三

スウはトイレのドアの横に立ち、篤子が出てくるのを待った。

しかし、いつまでたっても篠子は出てこない。

スウはてつきり、篤子のトイレが長いだけだろうとタ力をくくつて

数秒後、その安心感は打ち砕かれてしまった。

一簾子！？

アーヴィングの筆から、篠子の懸鳴が置き換えられたのだ。

- しまった！！

スウカトイレに乗り込んだ時には、篠子の姿は影もなくなって

いた。

「チクショウ・・・！」

スウは拳をふるわせたが、すぐに落ち着いた。

なぜなら、篠子が入ったと思われるトイレの壁が、少しだけズれていたからだ。

「もしかして、これは・・・」

スウは長年の感から、すぐにその壁が隠し扉だとわかつた。

ガコッ・・・

「やつぱりな・・・」

スウが思つたとおり、その壁の裏には空間が広がつていた。

ペンライトをつけてみると、うつすらと階段が見えた。

「・・・つて事は、だ・・・」

スウはある事を確信し、あの場所へと向かつた。

スウは考えを見いだし、ある場所に向かつた。

「！」

スウは足を止めた。

「やつぱりな・・・」

スウは全てを確信した。

「出て来いよ・・・そこにいるんだろ？」

スウが叫ぶと、朝霧哀が隠し扉から出て、オレの前に現れた。

その腕には、手足をロープで縛られ口をガムテープで塞がれた篠子が抱えられている。

「ん、んう！（ス、スウ！…）」

「動くなよ、明日岡・・・この女を殺されたくなきゃ、おとなしく・

・

「もついい加減、ヘタな芝居は止めよつぜ・・・そつだろ？逃走中の銀行強盗さん？」

「な・・・」

「（え？）」

篠子はキヨトンとしている。

まあ、それも当然か・・・

「な、何言つてるんだ！？オレが銀行強盗なワケ・・・」

「とほけんなよ・・・もうネタは上がつてんだ！！オレがアンタの事を疑うキッカケになつたのは、クラスでの自己紹介の時だ・・・アンタ、『自分は朝霧哀。それ以上でも、それ以下でもない』って言つて、出身中学校名も言わなかつたよなあ？それでわかつたんだよ・・・迂闊にしゃべつたら、正体がバレちまうからなあ・・・」

「グツ・・・」

「まあ、偶然アンタの顔を見ちまつた本物の朝霧哀をこの廃墟病院に閉じ込めて、後で始末する気だつたんだろーが・・・詰めが甘か

つたな！銀行強盗さん？

「ク、クツソオ！！！」

男は篠子を投げ出し、スウの方に向かつてきた。

ダダダダダ・・・

「アホか・・・」

スウはそう言うと、男の目に見えない速さで鉄拳をぶち込んだ。

ドドドドド・・・

「オマエはもう、氣絶している。」

スウがそう言つた瞬間、男はドサツと倒れ込んだ。

スウは篠子に駆け寄ると、縄とガムテープを解いた。

「篠子、大丈夫か？」

「うん・・・」

「一件落着・・・か。」

その後、スウが電話で呼んだ警察が到着し、男は逮捕され・・・

朝霧、笠美、青木、畠中の4人も無事に地下室から助け出した。

こうして、彼ら柏少年探偵団の記念すべき第1の事件は幕を閉じたのだった。

5人の探偵団は、まだ終わらねえ！！

FILE15・いきなり呼び出し！？

「セ朝霧の事件から3日後・・・
オレ達は何事もなかつたように、学校へと通つていた。
もつとも、被害者の朝霧は少し衰弱していたので、1日検査入院し
て再び学校へと戻つて来た。

「改めて自己紹介いたしまつす。小倉橋中学校から來た朝霧哀でつ
す。以後よろしく〜！」

「よろしく〜！」

朝霧の自己紹介に、オレ達4人は目を丸くした。

「（朝霧つて、こんなにテンション高いヤツだつたのか・・・）
オレと篤子、雄也、葉平、雅子の5人が、5人共全く同じ事を思つ
ていた・・・

「え？」

「オレ、何かしたつけ・・・？」

「あ、そうそう、浜谷さん達5人も来いだつてさ。」「はへ〜？」

オレ達6人は、廊下をゆっくり歩いていた。

「うーん、オレ達何かしたつけ・・・？」

「イヤ、絶対何もしてないわ！誓つて何もしてない〜！」

「同感だ・・・」

「ウチもや・・・」

「じゃあ、なんでこんな大勢でそろそろと行くんでしょうね・・・」

「さ、さあ・・・」

しばしの沈黙・・・

「ところで、朝霧・・・」

「ん?」

「オマエって、あんなにテンション高いヤツだつたんだな・・・」

「意外?ボクはこれでも普通のつもりなんだけどなあ・・・」

「(イヤイヤ、全然普通じゃねえよ(じゃないわよ)(じゃありますよ)(とかいうよ)ーだつて(そやかて)ギャップが・・・)」

「(そういえば、あん時の朝霧は銀行強盗が化けてたんだつけ・・・これが本来の朝霧哀なんだな・・・)」

オレは一応納得した。

そんな事を話してゐ間に、いつの間にかオレ達は校長室に着いていた。

そんな事を話している間に、オレ達は校長室に着いていた。
落ち着け・・・

オレ達は何もしていない！

普段通りにしていれば何も問題はないのか・・・？
いざ・・・

意を決して、オレは校長室の扉を開けた。

「待つておったよ、浜谷篤子君、笠美雄也君、畠中葉平君、青木雅子君、朝霧哀君、明日岡スウ君・・・どうした？」

校長が不審に思うのも無理はない。

オレ達全員、緊張しすぎてカツチーンと固まっているからだ。

「あの・・・オレ達何か悪い事しましたっけ・・・？」

「ともでもない。君達はむしろほめられる方だよ。逃走中だった銀行強盗を逮捕したんだからね。」

「ハ、ハハ・・・まあその通りですが・・・」

「そこで・・・だ。君達には他のグループより先に任務を与えようと思つ。お金持のある家に脅迫状が届いたのだ。君達にはその家の警護、並びに犯人逮捕を努めてもらいたい。できるかね？」

「はい、もちろんです！！」

やつとこの学校らしくなったか・・・

そんなワケで、オレ達は依頼人の家に向かう事となつた。

「ここが依頼人の家か・・・大きいな・・・」

「でもこの家の表札に書いてある名前、どこかで見たような気がするのですが・・・」

「どこで見たんやろ?」

「ふあ〜、今日も一日疲れましたわ・・・って、どうしてあなた方がここにいますの?」

「え?」

振り向いたオレ達の目線の先にいたのは、なんと・・・

「綾小路!? なんでオマエがここにいる!?」

「なんでって・・・ここは私の家ですわよ。」

「へ?」

オレ達は表札をよく見てみた。

『綾小路』

ああ、そういう事ね・・・

ああ・・・

またなんか事件が起ころる気がしてきた・・・

これも探偵のカンなのか?

そう思いながら、オレ達は綾小路家に入つていった。

オレ達は執事らしき人に案内され、綾小路邸の中を歩いていた。

「うわ～、中も広いわね～・・・」

篤子の率直な感想だ。

「小生のデータによると、彼女は綾小路財閥の二令嬢で、とても父親にかわいがられているそうですよ。」

葉平がメモ帳を開きながら言つ。

「そうか。通りで横柄な・・・」

「ウチの嫌いなタイプやな・・・」

どうも雅子は、綾小路のようなタイプの女が嫌いらしい。
気持ちはわからぬもないのだが・・・

そんな事を言つてゐる間に、一番重要だと思われる部屋に着いた。
オレ達は中に入つていく。

「これが予告状です。」

執事さんから予告状が手渡される。

オレ達は予告状を注意深く読んだ。

『みょうじや明日夜8時、

みどりご翠色・金色・

紅色・純紺色の宝石を
頂きに参上する

怪盗鳳鳴『

見たところ特に普通の予告状と変わらないが、気になつたのは差出

人の名前だ。

「怪盗・・・鳳鳴?」

『おおとりがらす』というのが読み方だらう。
やけにけつた的な名前の怪盗だな・・・

オレの第1の感想はそれだつた。

オレ達は泊まり込んで警備を手伝いをするため、それぞれ泊まる部屋を用意された。

部屋割りは、

オレと篤子

葉平と雅子

哀と雄也

である。

とりあえず、守ればいいんだ、守れば・・・

何も起こらない事を祈ろう・・・

オレはそう思つたが、何かが起ころのが事件といつものだ。
その時は信じられなかつた。

まさか、あんな事が起こるとは・・・

オレが部屋で考え込んでいると、散歩に出ていた篠子が戻つて來た。
どうやら、夕食の用意ができたらしい。
しかし、オレは考えたい事があつたため、『食事は部屋に持つて來
させてくれ』と篠子に頼んだ。

すると、篠子も部屋で食べると言つ出した。

その事を伝えに行かせたオレは、少し考え込んでいた。

怪盗鳳鳴・・・

ヤツの目的は、一体何なんだ・・・?
考えていても推理が全く進まない。
しううがねえ。

とつあえず、夕食を食べてからにするか・・・

持つて来てもらつた夕食を食べた後、オレと篠子は妙に眠くなつた。
別に料理に睡眠薬が入つていたとか、そういうものではない。
ただ単に寝なくなつただけだ。

そんなワケで、オレと篠子は眠りについた。

朝早く起きて、食堂に行つたオレ達だが、何だかあわただしい。
綾小路によると、父親がまだ部屋から出て来てないらしい。

つたぐ、つべづく世話の焼けるオヤジだな・・・
オレ達は、綾小路の父親を起こしに向かった。

そして、起こしに行つた部屋で衝撃的な事が起こつた。
なんと、厳重に密室にされた部屋の中で、綾小路の父親が後頭部を
殴られ倒れていたのだ。

つて言つても、カギが掛かっていたのでオレが窓から中をのぞき込
んだのだが。

ドアをブチ破り、オレは綾小路の父親の元に歩み寄る。
篤子達が、彼はどうなつたのかと聞いてくる。

オレは脈を確認すると、静かに首を横に振つた・・・

FILE19・最初の依頼『4』

事件発生後、警察は結構早く来た。

それはそうだ。

綾小路の家に着いた時、オレが既に警察を呼んで付近を見張らせていたのだからな。

え？

なんでオレにそんな権限があるかつて？

それについては、来ている刑事に説明してもらう事にしよう。

「さて、あしたおか君。事件について話してくれるか？」

「そりや、今までと同じくちゃんと協力するけどさ・・・いい加減にオレの名字覚えてくれねえか？中嶋警部。」

「ス、スマン、明日岡君。この所君に会つてないから、つこな・・・」

オレに謝ったこのオッサンが、なかじましげつぐ中嶋茂次警部。

初等部の頃から世話をなつてる刑事だ。

つつても、ただ事件解決に貢献してるだけだがな。

「ワザとだったら、オヤジに報告するよ、中嶋さん？」

「そ、それは勘弁してくれ・・・」

中嶋警部は謝った。

さて、なぜオヤジの事を聞いて警部が謝ったのかといつと、オレのオヤジは警視庁の鬼警部だからだ。

ちなみに、オヤジはオレと名字が違い、みやぞのよしひる宮園義啓といつ。

その理由は、親子である事で捜査が不利になる事も多いからなのだとりあえず、現場検証が始まった。

部屋はドアにカギが掛かっていて、完全な密室。

しかもそのカギは、部屋の中にある分厚いノートの下にあつたのだ。さらに、本棚が倒れている。

普通の人なら、こんな状況では自殺か事故死だと思つだらう。

しかし、オレはそうは思えなかつた。

明らかにこの部屋は不自然だつたからだ。

そういうえば、ご主人の指が示す先に、なぜかマンガがあつたな。

タイトルは確か、M : A R。

週刊少年サンデーで連載されていたマンガだ。

なぜ、ご主人の指はマンガを指差していたのだろうか？

謎はさらに深まりそうだな・・・

「おい、聞き込みは終わつたか？」

中嶋警部が後ろを向いて叫ぶと、有能そうな刑事が走つて來た。

「はい、中嶋警部！関係者への聞き込み、一通り終えまし……たわつ！」

ズツ！

ドテツ！

その人は急につまずいて「コケた。

「コケた……」

「コケたわね……」

「コケたな……」

「コケましたね……」

「……大丈夫か？江茉……」

「はい、大丈夫です……わつ……！」

バタツ！

・・・また「コケた……

この刑事さん……

有能そうに見えるけど……

間違いなく天然だ……

「……と、このように「コケまくつ」といふのが、コイツがオレの部下、女刑事の江茉^{えまつ}香^{ゆみか}だ。」

「初めまして！中嶋警部の部下の江茉です。よろしくお願ひします。

・・・わつ……！」

ドシャツ！

またしても「コケた……

この女刑事さん……

やつぱりどう考へても天然だ……

「で？どうだつた？」

「はい。事件当夜、屋敷にいたほとんどの人にアリバイがありました。ですが、アリバイが曖昧な人が3人いました。」

「ほう、それはどいつだ？」

「執事長をしている稻垣直久さん、メイドの西風芳香さん。にしかぜ ほうか後1人は・・・綾小路梨華さんです・・・」

オレ達は、少し表情が曇る。

綾小路まで容疑者なんて・・・

まさか、アイツが・・・？

オレは一瞬そう考えたが、すぐに自分の頭をゴツンと叩いた。バカな、一瞬でもオレは何を考えてるんだ！？

綾小路が犯人なワケないだろ？

彼女はきっと、オレ達が解決してくれるのを待つている。

だつたら、オレがこの事件の真相を解き明かしてやるぜ・・・

この世に解けない謎なんて・・・

チリ一つだつてありはしないんだからな！！

オレが必ず、この事件を解き明かす・・・
そう心に決めたオレだったが、わからない事が多すぎる。
何だって、事故死に見せかける必要があつたんだ?
それに、被害者が握っていたこのマンガ・・・
何か意味があるのか・・・?

まあ、何か意味がなければこんな物を握るワケがないか・・・
オレはそう思いながら、そのマンガを手に取った。
パラパラとページをめくっていたオレだったが、あるページで手が
止まつた。

「ん!?（何だ!?)」の血は・・・既に乾ききつている・・・）警
部！」

「何だね、スウ君？」

「IJの血痕のDNAが誰なのか、大至急調べてくれ。と、その前に・
・青木!」

オレは青木を呼んだ。

「何や、明日岡君?」

「このページに記されている物を瞬間記憶で記憶しておいてくれ。こ
れから警部達にこのマンガを調べてもらひながら、しばらく触れなぐ
なる。」

「オッケー、任しどき!」

そう言つと、青木はマンガを食い入るように見つめた。

「終わつたで。」

「早つ!」

「ウチの瞬間記憶は、一瞬見ただけで全部覚えられるんで。」

「そ、そなんだ・・・じやあ警部、頼みます。」

「わかった。」

中嶋警部は、部下と共に部屋を出ていった。

さて、オレにもやる事があるな。

オレはカギが隠れていたノートをくまなく調べた。
しかし、どこも変わったトコはない。

あれ？

このノート、やけに裏の厚紙がしつかりしているな・・・
待てよ？

確か前に某有名マンガで読んだぞ！

これと全くよく似た状況を！！

確か、確か・・・

オレは少し考えると、不適な笑みを浮かべた。

そうか、わかつた！

やつと思い出したぞ・・・

なーるほどね・・・

そういう事だつたか・・・

だったら、あのマンガで血がついていたページの意味は・・・

「青木！ 血痕がついていたページには、何て記してあつた？」

「ん？ 確かなあ・・・」

青木からページに記してあつた物を聞いた事で、全ての複雑な糸が
1本につながつた。

やつと解けたぜ！

この事件のトリックがな！

後は、警部からの鑑定結果を聞くだけだ・・・

あれ？

そういうえば、綾小路はどこに行つたんだ・・・？

オレは辺りを見渡した。

い、いない！

消えてやがる！

まさか、犯人が！？

そんな事を考えていると、警部が戻つて來た。

警部から鑑定結果を聞き終わつたオレは、即座にある場所を目指して

走り出した
・
・
・

FILE22・最初の依頼『7』（前書き）

この事件のトリックは、『名探偵コナン1~8巻』のトリックを参考にしています。

あらかじめご了承ください。

オレは事件の真相に気づき、ある場所に向かった。

それは、被害者の部屋だった。

「明日岡君、なぜ被害者の部屋に戻つたんだ？」

「気づいたからさ・・・事件の真相にね。今から『7』でやってみせ
るよ・・・」

そう言つと、オレはトリックを実演した。

「おお・・・」

オレのトリック実演に、中嶋警部達は感心した。

「で、このトリックをやつたのは誰なんだ？」

「今から行くよ。その人の所に・・・」

う解けた・・・カセットテープとチエスのローンの駒、そして厚紙がしつかりしたノートを使った、某漫画のトリックをな！！」

「・・・！」

「アンタはおそらく事件前に綾小路さんと何かしらの事で会つていいんだろ？。そして、ある原因で思わず撲殺してしまったんだ・・・。運良く漫画のトリックを思い出し、密室にする事はできたし、手袋もつけて指紋を残さず、完璧だと思つたんだろうが・・・被害者は残していたんだよ、死の間際にアンタを指示示すダイイングメッセージをな。それは・・・この漫画だ。」

そう言つと、オレはM・A・Rという漫画の単行本を取り出した。

「この本のあるページに血がついていたんだよ。そしてこのページには『ゼピュロスブルーム』といつ名の・A・R・Mが載つている。もうわかるよな？これが何を指示示すのか・・・」

「ゼピュロスブルームは『西風のホウキ』・・・私を示すダイイングメッセージってワケね・・・負けたわ・・・」

「それに、部屋の中のどこかに閉じ込めてるんだろ？綾小路を・・・」

「

オレが言つと、芳香はクローゼットを開ける。
そこには、眠られた綾小路がいたのだった。

クローゼットから、綾小路が見つかった。

綾小路は睡眠薬を嗅がれていたらしく、スースー眠っている。

「綾小路さんを殺害した動機は何なんだ？」

「お嬢様をお守りするためなのです。今の旦那様は2番目の亭主様なのですが、毎日のようにお嬢様や私に虐待を加えていました・・・あんな疫病神に、あの人の大なお嬢様がイジメられるのが耐えられなかつたんです・・・」

「あなたの事は調べさせてもらつたよ。あなたは前の旦那様の妹なんだつてな。」

「はい、そうです。それと今の旦那様は兄の元同級生でした・・・私は兄から頼まれたのです。『娘を守つてやつてくれ』と・・・お嬢様を守るためなら、私は・・・」

「確かに、アイツは調べによるところでもないヤツだつた・・・だからつて、殺して良いつて事にはならないんだよ。西風さん・・・人の命は大切なんだ・・・例え、どんなヤツでもな・・・」

「そうですね・・・」

その後、警察の調べで事件当時綾小路の義理の父が西風さんを殺そうとしていた事が判明し、ナイフで切られたという証言から西風さんは正当防衛だと見なされ、罪も綾小路を監禁した事だけが問われる事となり、少しだけ軽くなつた。

とはいへ、少なくとも半年は出られないらしいが・・・

綾小路はあれから毎日面会に行つてゐる。

一皿も早く、また西風をひと廻り」せる事を夢見て……

さて、最初の依頼も完了した所で、そろそろオレと篠子の秘密を明かしておこうか。

なぜオレと篠子が、中嶋警部に一日置かれているのかを……

それは、オレと篠子が小学5年生の時の事だった……

FILM24・ファースト・パンタクト（最初の出来事）『1』

「セツセツの道通りたで～。」

「もう4時間も歩いているのに・・・ねえ、本当にこっちで合ってるの？スウ！スウ？もう・・・すげどっかに行っちゃうんだから・・・」

「おおおおい！早く来ないと、置いてくよーーー！イヤッハアアアアアツー！」

スタッフ！

「へへー！あの超有名な推理作家、中嶋轟蔵に会えるんだ。ワクワクしちゃうよー早く来ないと置いてくよーー！」

「ウチも全巻読んでるでーー！」

「ちよつ、ちよつと待つてよー。」

「うーか・・・」

『中嶋轟蔵 推理作家』

「・・・」

「（レ）この人がそつか・・・）」

「（怖そうなオジサン・・・）」

「フ・・・アツハツハツ、コイツは傑作だ！君らがあの有名な少年探偵部下。どんなクソ生意気なガキかと思ったが・・・何だ、普通の子じゃないか！－」

ガシ！

「私も孫を見るようで安心するよ。それにひきかえ、我が子達と
きたら・・・」

「そうそう、その子供達にあなたが・・・」

バタン！

『中嶋茂次 中嶋家次男 警視庁捜査一課警部』

「探偵を呼んだんですって、父さん！？これでも私は警視庁の警部
なんですよ！？それを差し置いて・・・」

「バカモン、来客中だ！！」

「フン、ただのガキじゃねえか・・・全く。」

バタン！

「子供達がここへ集まつたのは、私の遺産相続の件だ・・・自分で
言つのも何だが、私は推理作家として大成功し、巨万の富を得る事
ができた・・・それで子供達ときたら、私の顔を見る度に金金金。
だが、私はあんなバカ共に遺産をやる気はないんだ。つまりだ・・・
ヤツらは私が遺書を書く前に、私を殺す氣なんだよ。その時こそ、
君達の出番だ。」

「はい・・・」

「父さん、ボク達という立派な子供がいるといつて、遺産を寄付
するとは何事です！？」

『中嶋一葉 中嶋家長女 医者』

「病院の経営には、お金が必要なのよーーー！」

『中嶋孝三』

「それはボクも同じだ。」

「オイコラ、オレ抜きで話を進めるなーーー！」

「つるせい、オマエは引っ込んでる！－！」

「ちょっと、オジサン達、さっきからお金お金って・・・それじゃ、

オジサンがあんまりだわ・・・」

「フワア・・・そんで？誰がジイサンの命を狙ってるの？」

「そんで？誰がジイサンの命を狙ってるの？」

「・・・」

「また、お父様が妙なウワサを流して・・・」

「わからんぜ、誰かさんは新しい家買って金に困つてひりつしやるから。」

「アンタこそ、金融会社に借金してるじゃないのよ・・・」

「オレは市民を守る刑事だぞ。殺すなんて、警視庁の名誉を阻害するような事・・・とんでもない。」

「あ～、わかったわかった。止め止め、もう止め！..晩ゴハンにしようよ、ジイサン。」

「おう！」

「ガキの探偵、ゴッコにも困ったもんだぜ。」

「あー、オジサン達？今晚は無闇に出歩かない方が良いよ。何か起きたら、疑われても文句言えないかんね。」

「何で、私や真古みたいなレディーがスウと一緒に部屋なワケ！？」
「しょうがないだろ、部屋数が足らないんだから！」
「スウ、どう思つ？本当に何か起こるかしら・・・？」
「まだ何とも言えないね。君はどう思つんだよ、篤子？」
「ううん、私もわかんない。でも・・・あのオジサン、何だか寂しそうで・・・」
「そうだな・・・」
「バフッ！」

「ブワッ！？」

「油断は禁物やで、スウ！」

「何しやがる、真古！…」

「何も起こりなきや良いけど…」

「遺産か…ん？おかしいな、1冊抜けてる…」「

「ギャアアアアアアー！」

「…ヤベエ、寝ちまつた。」

ダツ！

「開けてくれ、ジイサン！…どうしたんだ！…チイツ、カギが掛かつてゐ…・・・真古、頼む！…」

「了解！…アアアアア…・・・ハツ！…！」

ドカツ！…

バツ！

「ジイサン！…」

「どうしたんだ、今の悲鳴は！…」「

「…・…！」

カチッ・・・

「大丈夫でしたか、父さん。」

スツ・・・

ドサツ！

「キヤアアアアアアーー！」

「す、すぐに応援部隊を・・・」

「待て！誰もここから出るなーー！」

「な、何？」

「誰もここから出るなと言つているんだーーこの部屋は完全な密室になつていたーー警察を呼ぶ必要はないーー！」

「な・・・これでもオレは警視庁の警部なんだぞ！探偵、ゴツコはもう終わりだーー！」

ガツ！

「・・・・け、警視バッジ！？な、何だ・・・何なんだ・・・！？

オマエら、一体何なんだ！？！」

バツ！

「ボクは警視庁捜査秘密課、明日岡スウ 警視正だーー！」

「私は警視の浜谷篤子ーー！」

「ウチは警部の保安真古やーー！」

「け、警視庁・・・」

「捜査・・・」

「秘密課！？」

「ウワサには聞いた事がある。東京都公安委員の特殊捜査チーム！？」

『裏の警察』とも呼ばれるあの・・・！？

「これからは、ボク達の指示に従つてもうりつよ、警部ーー！」

「まず、現場の状況から考えてみよう。」J覧の通りこの部屋には窓が一切ない。そして中から鍵が掛かっていた。つまり、密室というワケだ！」

「自殺の線はないのか？」

「ないね。おじいさんはナイフのような物で刺殺されているが、凶器は未だ見つかっていない。」

「自殺してから凶器は隠せへんよ。」

「やつぱり我々だけじゃ無理だ！ 応援を呼ぼう！』

「その必要はないね。』

「一体どうなってるの…？』

「落ち着いてくださいよ。こんなもん、トリックでも何でもないです！」

「じゃあ、オマエにはわかるのか？」

「もちろん！ 少なくとも、密室の謎についてだけはね。』

「つまり、犯人は私達がこの部屋に入った時点で、まだこの部屋の中にいたのです！」

「皆さん、この部屋に来た時、誰と一緒にでした？」

「あわててたんで、覚えとらん…」

「ボクも。」

「私も。」

「でしょ？ つまり犯人は他の人と一緒に来たフリをして、ドアの影から「ツッソリ出て来たってワケ！ つまり… Jの中に犯人がいる！ もちろん、ボクら3人を含めた全員の中に…」

「この中に犯人がいるのはわかった。しかし、どうやって殺されたんだ？」

「そう、凶器はまだ見つかっていない。それどころか、その凶器が何であるかすらわかつてない。それが今回の事件の最大の謎ってワケだ！」

ケか・・・

「そ、うだ、凶器がなければ犯行は立証できな、ぞ！」
「念のために、全員の身体検査だ。」

「よーし、これで全員終わりだな。」

「ついに何も出て来なかつたわね。」

「イヤ、コイツは医者なんだ。メスぐらい持つてるハズだ！！」

「あなただつてナイフのコレクシヨンしてたでしょが！！」

「ケツ！凶器が出て来ないんじやねえ・・・刑事さんがそういうもそ

ろつて全く・・・」

「ケンカは止めえや。」

ドカッ！

「わー！」

ドタン！

「？あれ？12巻田だけ抜けとる。12巻田・・・？」

「（密室である以上、凶器はこの部屋のどこかにあるハズだ・・・
どこだ？凶器を隠せる場所・・・）」

ガシャヤ！

「？」

ピチャーン！

「？」

「ちょっと止めてください、おじさん達。ねえ、スウ！何とかして
よ。ねえ、スウ・・・ス・・・・！」

「わかつたぞ！・・・」

「・・・思い出した・・・」

「

「見つかったのか、凶器が！？」

「いいや。凶器はもう、この世のどこにもない。ボクが見つけたのは、昔凶器だった物の成れの果ての姿だよ。」

「良いから早く話せ！！」

「良いでしょ。初めから説明します。この部屋には争つた形跡がない。つまり、顔見知りの犯行だ。そして犯人はカギを掛け、ドアの影に隠れた。」

「でも、その時既に犯人は証拠の隠滅をしてたのよ。」

「そう、犯人が凶器を隠した場所・・・それは、あのポットの中だ！」覧の通り、カップには湯気が立っている。それなら当然このポットの中には、熱々のお湯のハズだ！誰もぬるい紅茶なんか飲みたくない。ところが・・・

チヨロロロ・・・

「水・・・？」

「そう！でも、良く見て『覧よ。

「赤い！？赤い水だ！！」

「鑑識に回せばわかるだろうけど、おそれく血だね、これは。ここで問題！ポットのお湯を水に変え、さらに消えてしまう凶器とは何か？」

「氷か！？」

「ご名答！でもそんな物、冷蔵庫には入つてなかつた。」

「そ、そうだ！入つてなかつたぞ！！」

「そう！犯人は冷蔵庫を使わなかつた。」

「イヤ、使えなかつたんだ！凶器をみんなの目に触れるような場所に置くほど、この犯人はバカじやない。他に氷を保存する方法といつたら何だろうか？」

「うーん、他にはクーラーボックスぐらいしか・・・クーラーボッ

クス！？」

「そう！！犯人はあなただ、孝三さん。」

「・・・」

「孝三さん、あなたここに釣りをしに来たんでしたね。」

「孝三、あなた・・・」

「そんな！クーラーボックスを持つてたぐらいで・・・ちがう、オレじゃない！ガキの推理なんかにだまされるな！！」

「鍵岡警部シリーズ第13作・・・消えた凶器の謎・・・今回と同じ、氷を使うトリックや。たぶん、孝三さんのカバンの中にでも入ってるんや。」

「うわあああ！！父さんが遺産を寄付するなんて言つから・・・オレにはどうしても、金が必要だつたんだあ！！」

「良く思い出したな、真古ー。」

「全巻読んでるで言つたハズやで。」

「自分で考えたトリックで殺されるなんて、かわいそう・・・」

「これより、容疑者を連行いたします。明日岡警視正！..」

「・・・じくろうー。」

「ホームズ、お礼に今度昼食でも齧つてやるぜー。」

警視庁捜査秘密課の特殊捜査チーム。

その推理力は天才的と言われている。

だが、彼らの存在を知る者は少ない・・・

FILE28：かつての仲間へのお見舞い

スウは柏中央病院に来ていた。

ある病室まで足を運ぶ。

そして、その病室のドアを開けた。

部屋のベッドには、1人の少女が静かに寝ていた。

「また来たぜ・・・真古・・・」

スウは少女に話しかけた。

ベッドで寝ている少女の名前は、保安真古。

スウや篠子の幼なじみで、警視庁捜査秘密課のメンバーの一人である。

なぜ彼女が病院に入院しているかというと、真古はかつてある犯罪組織との戦いの時、体に重傷を負つて手術を受けたからだ。その後手術は無事成功したが、後遺症で彼女は植物状態になってしまったのである。

スウが真古のお見舞いに通っているのも、当時彼女がスウをかばつて重傷を負ったからである。

「まだ目が覚めないか、真古・・・看護婦さんが定期的に水分を与えているようだけど・・・」

スウはそう言いつと、病室を後にした。

スウが病院を出ると、篠子が立っていた。

「どうだつた？ 真古の容態。」

「まだ目が覚めないみたいだ。」

スウは静かに言つた。

「ねえ、この事件アタシ達だけじゃ力不足よ。笠美君達にも協力を頼まない？」

「止めた方が良い。オレ達が追っているヤツらは、アイツらじゅ荷が重すぎる。」

「そんなものかしら。」

「ああ。オレはもう2度と親友をキズつけたくない。オレ達2人での事件を必ず解決してやるんだ。」

「そうね。あなたのそういうところ、アタシは好きよ。」

篠子は笑顔で言う。

「フツ、嬉しい事言つねえ。」

スウも満更でもなさそうだ。

「そろそろ、雅子ちゃんからメールが来てたよ。」

「青木からか。内容は何だつて？」

「畠中君と一緒に買い物に行つてたらしいんだけど、そこで不思議な光景を見たそうよ。」

「不思議な光景?何なんだ?」

スウは顔をしかめながら言う。

「笠美君が、年下の女の子と一緒に歩いてたそりよ。」

「へ?そいつあ興味深い事だな。で、青木と葉平は今ビニにいるつて?」

「南柏町のカフェだつてさ。アタシ達も行く?」

「ああ。何か面白そだからな。」

スウと篠子は、正子と葉平が待つているカフェへと向かつた。

FILE29・笠美と謎の少女を尾行せよ『前編』

スウと篠子が南柏町のカフェに入ると、葉平と雅子が席で待っていた。

「ようやく来ましたね。」

「待つとつたで。」

「待たせたな。ところで、肝心の2人はどこにいるんだ？」
オレが素っ気なく聞くと、雅子は笑みを浮かべながら、「このカフェの反対側にあるデパートで買い物しどう。」
とニヤつきながら言った。

「買い物が終わったら何か食べようかとか話していましたから、直にここに来るでしょう。そういうワケで・・・」

葉平はそこまで言つと、袋から何かを取り出した。

それは、帽子とサングラスだった。

「これで変装してください。」

「ハア！？」

葉平の言葉に、スウは口ケそうになつた。

「何でオレ達が変装なんかしなきゃいけないんだよ？」

オレが聞くと、葉平はキヨトンとして、

「そりや、そのままだと小生らだと彼にバレるからじゃないですか。」

「

葉平はシレッと言つた。

まあ、確かにそうなのだが・・・

スウ達は、帽子とサングラスで変装した。

端から見たら、どつかの怪しい集団じゃねえか・・・？

スウは思つた。

これにマスクもプラスしたら、完璧に悪者の格好だな。

そんな発想が出た事に、スウは苦笑いしていた。

「あ！入つて來たで。2人が。」

雅子の発言に、スウ達は反応した。

スウ達が入口の方を見ると、雄也が1人の女の子と一緒に店に入つて來た。

「（篠子には及ばないが、なかなか美人だな。ん？あの女・・・どこかで見たような・・・）」

スウは疑問を抱きながら、少女を見ていた。

果たして、この少女の正体とは・・・？

スウ達は2人に怪しまれないよう、料理を注文した。

雄也達2人も、料理を注文している。

30分ほどしてスウ達が食事を終えると、丁度雄也達も終わつたところだつた。

レジで会計を済ませ、カフェを出て行く。

スウ達は素早く会計を終えると、気づかれないように2人の尾行を開始した。

FILE30・笠美と謎の少女を尾行せよ『後編』

カフェから出たスウ達4人は、雄也と謎の少女を尾行していた。よく見ると、少女は腕を雄也に絡めている。

「2人共、良い感じじゃないですか。」

葉平が微笑みながら言つた。

「そやな。」

雅子も微笑んでいる。

「・・・」

スウが顔をしかめているのを見て、篠子が話しかけてきた。

「どうしたの、スウ？さつきから顔が怖いよ？」

篠子の言葉に、スウはハッとした。

「わ、悪い・・・彼女、どこかで見た気がして・・・つい、な。」

「フウン。」

スウの言葉に篠子が素っ気なく返事する。

スウ達が尾行している事に気づいているのか、雄也は速度を急に上げた。

「あ、速度を上げた。」

「気づいたんでしょうかね。」

「見失わないよう追うで！」

スウ達は、見失わない程度について行つた。

しばらく買い物やら何やらをして、雄也と少女は公園に着いた。

「ここがあなたのお気にの場所なの？」

少女が聞く。

「ああ。疲れた時は息抜きに來てるんだ。」

「そうなの・・・ねえ！携帯の番号交換しない？」

「番号?」

「うん。また連絡取りたいし。」

「そうだな。わかった。」

雄也と少女は番号を交換した。

「じゃあ、私はもう帰るから。」

「ああ、また会おうな。」

少女は足早に去つて行つた。

「さて、と。」

雄也は茂みの方をにらんだ。

「出で来なよ、みんな。」

雄也が言つと、スウ達が茂みから出て來た。

「タハハ、やつぱばれてたか。」

「当たり前だよ。バレバレだつたし。」

「それにして、スウが言つてたどこかで見た気がするつて言葉・・・

・妙に気になるわね・・・」

スウ達は、うなずきあつていた。

「ウフフ・・・面白くなりそうだわ。」

あの少女が、自宅で不敵に笑つていた・・・
果たして、少女の正体とは・・・?

FILE31・疑惑の転校生、桜菜！！

スウと篠子が登校して来ると、やけに教室内が騒がしかつた。気になつたスウは、近くにいた雅子に聞いてみる。

「青木、何なんだこの騒ぎは？」

「ああ、明日岡君。何でも今日このクラスに転校生が来るんやで。

「このクラスに転校生が？」

「ええ。何でも全教科満点のトップな上、飛び級で入つて来るそ

です。」

葉平も話に加わった。

「何い！？」

葉平のセリフに、スウと篠子は驚いた。

何しろ、こここのクラスに入るためのテストは超難関であり、満点を取つたのはスウと篠子の2人だけなのだ。

それなのに、その難関テストを満点合格した上に飛び級で入つて来るとは・・・

「一体どんな子だろうね、スウ？」

「さあな。」

スウは口ではそう言いながらも、『まさかな・・・』といつ顔をしていた。

そして、彼の予感は的中する事になる。ガラツと扉が開いて、雅が入つて來た。

「オマエら、席に着けーーー！」

スウ達は慌ただしく席に着席した。

「ホームルームを始める前に、転校生を紹介する。入つて來い！」

「はい！」

再び扉が開くと、金髪の少女が入つて來た。

その彼女の姿に、スウ達4人は思わず『あつーー』と叫びそうになつた。

なぜなら彼女こそ、先日スウ達が尾行していた笠美のデート相手だつたからだ。

「自己紹介してくれ。」

「はい。」

彼女は返事すると、黒板に名前をサラサラと書いた。

成瀬 桜菜

「今日からこのクラスに転校してきました、成瀬桜菜です。ナルセ ハルナまだ14歳で若輩者ですが、皆さんに追いつけるよう精一杯努力していくたいと思いますので、皆さんよろしくお願ひします！」

彼女の自己紹介に、クラスメート達は暖かい拍手を送った。

そんな中、スウ達5人は彼女を疑惑の眼差しで見つめていた・・・

放課後になると、桜菜の元にクラスメイト達が集まって来た。

「桜菜さんつて、どこから転校して來たんですか？」

「両親は何をしているんですか？」

「兄弟はいますか？」

「好きな人とかはいますか？」

日々に質問をするクラスメイト達。

そこにスウ達もやって來た。

「そんなに一気に質問したら、答えにくいやろ?」

突っ込みを入れる雅子。

「良いわよ。全部答えてあげる。アタシの生まれば青森、育ったのは長野。」

「リンゴの名産地と、スキーで有名な県ですね。」

葉平がメモ帳を開きながら言う。

「そうよ。次に両親の事だけど、アタシには母親がないの。アタシが8歳の時に亡くなつたわ。」

「父子家庭つてワケか。」

「そうよ、だからアタシは父に育てられたわ。父は小学校の先生をしても。次に兄弟だけど、アタシには兄がいるわ。滅多に帰つて来ないけどね。最後の質問、好きな人がいるかどうかだけど・・・既にこの近くにいるわ。この人よ。」

そう言つと、桜菜は雄也を指差した。

「やっぱ笠美だつたか。」

「ええ、一曰惚れつてヤツよ。」

そんな会話をしていると、軽井沢が教室に戻つて來た。

ガラツ！

「明日岡、浜谷、青木、畠中、笠美、朝霧！呼び出しだ！」

「呼び出しつて、誰からですか？」

「中嶋茂次って人だ。オマエら、何かやらかしたのか？」

軽井沢の言葉に、スウ達は一瞬沈黙した。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「そんなワケないでしが・・・」

スウはそう言つと、ため息をついた。

職員室で、スウ達6人は中嶋と会つていた。

なぜか桜菜もいる。

「警部、頼むから連絡はメールでしてくれつて言つただろ？何のためにアドレス教えたんだよ。」

スウは文句を言つている。

「スマンみんな。携帯の電池が切れてたもんでな。」

中嶋は平謝りする。

「まあ別に良いけども・・・で、こんな時間に来るつて事は、また事件か？」

「話が早いな。そなんだ。今から来てくれるか？」

「ああ、良いよ。みんなどうせヒマだし。な？」

篤子達も頷く。

「それは良かった。ところで・・・一緒にいるこの子誰だ？」

中嶋は桜菜の方を向いて言つ。

「さつきからずっとおつたやないかい！――」

雅子が叫んだ。

「今日この学校に転校して來た、成瀬桜菜です。」

「成瀬君か。オレは中嶋茂次、階級は警部だ。よろしくな。」

「よろしく。」

「じゃあ、そろそろ行くか。」

スウ達7人は、中嶋について行つた。

スウ達は、病院のある部屋に案内された。

『急患専用治療室』

「毒殺！？」

「ちょっと待つて、この人をつき死んだばかりなんでしょう？」

「そやのに何で毒殺やとわかるんや？」

スウ達は口々に言つ。

「被害者が食べていたケーキから毒物が検出されたんだよ。何だと
思う？トリカブトだよ。」

「キンポウゲ科の植物で、非常に強い毒性を持つアレですね？」

「ああ、毒素を抜けば漢方薬としても使える代物だ。」

葉平の質問にスウが答える。

「側にいた女性がケーキを怪しいと感じて、警察に通報したそうだ。
それですぐわかったんだよ。被害者は桐沢香代子^{カイジヤ}、65歳。茶道、
桐沢流の家元だ。」

「家元？」

「お茶の先生の事ですよ。」

「で、問題のケーキなんだが・・・ケーキはお茶うけとして食べて
いたようだ。だが、お茶の方からは毒物は検出されなかつたんだ。」

「おかしいよ。」

「何がだ、朝霧君？」

「お茶の先生なら普通、和菓子だよ。ケーキは合わないよ。」

「言われてみればそうだな。」

スウ達が会話をしていると、ドアの向こうから人の声が聞こえて來
た。

「何があつたっていうんです？何で警察が来てるんですか！？」

「ですから、もうすぐ説明がありますから！..」

『ナナモリヒロユキ
七森宏之 家元の一番弟子』

「家元は・・・桐沢はどうなったんですか！？」

『村山卓郎 （ムラヤマタクロー） 同じく家元の一番弟子』

「お願いです、教えてください。」

ギイイ・・・

「お気の毒ですが、桐沢さんは先程お亡くなりになりました。」

「何て事だ！こんな日に・・・！」

「おい、頼むよ。一目家元に会わせてくれ！」

「すみませんが、それはできません。遺体はこれから司法解剖にまわされます。」

「解剖！？」

「何でそんな事を！？」

「被害者が食べていたケーキからトリカブトの毒が検出されます。つまりこれは意図的な殺人の可能性があるんです。」

「バカな！こんな力キに何がわかるっていうんだ！？」

「そうですよ、第一何でこんな所に高校生が7人も？」

スウと篠子は警察手帳を取り出した。

バツ！

「オレは警視庁捜査秘密課、明日岡スウ 警視正だ！！」

「！？」

「アタシは同じく警視の浜谷篠子！！そしてこの5人はアタシ達の仲間です。」

「協力していただけますね？」

スウ達は、ある部屋に集まつた。

1人の女性が涙を流している。

「彼女は住み込みで、被害者の身の回りの世話をしていたお弟子さんです。ケーキの異常に気づいて、110番通報をしてくださった方です。その2人も被害者のお弟子さんです。以上、この3人が被害者が倒れた時側にいた人物です。」

「それじゃあ、2・3質問させてください。今日は何の日なんですか?さつき村山さんが言つてましたよ、『こんな日に』って。今日はあなた達にとって何か特別な日なんでしょう?」

さつきの女性が口を開いた。

『神菜遊乃 家元の弟子』

「実は今日、桐沢流の後継者を決めるハズだつたんです。今日私達が家元の所に集まつたのは、次期後継者の発表を聞くためだつたんです。家元は今年で65歳になりましたが、お子さんがいません。そこで、一番弟子の内の誰かを後継者にするおつもりだつたんです。」

「で、その後継者は?」

「家元は普段から、実力では村山さんが一番だとおっしゃつてしまつた。」

「だからって、村山が選ばれるとは限らないじゃないか!!--」

「いや、家元はこの私を桐沢流5代目の後継者にするおつもりだつたんですね!!」

「バカな!オマエが後継者だと!?」

「3日前、家元がわざわざ私の家を訪ねて来てくださいました。」

その時私を後継者にするとおっしゃつて、立派な花の鉢植えまで頂きました。」

「鉢植え?」

「ええ、家元は生け花の腕も中々のものだつたんです。花の事にもそれはそれはお詳しい方で。」

「ああ、そういうえば季節外れの花だから、手に入れるのに苦労されたようでした。『これで私の気持ちが伝わるでしょう』とおっしゃつてました。」

「季節外れの花をわざわざ用意するつて事は、よっぽど後継者として村山さんに期待してたようだな。」

「でも、残念です。できれば、家元の口から発表していただきたかった。」

その時、江茉弓香が部屋に入つて来た。

ガチャ！

「失礼します。司法解剖の結果が出ました。」

スウは紙を見た。

「どうだつた！？」

スウは黙つて紙を渡す。

「死因はやはりトリカブトによる中毒死だな。ケーキに混入されたいた毒とも完全に一致してる。思つた通りじゃないか。」

中嶋はそう言つたが、スウは納得いかないといつ表情をしている。そして、遊乃の方を向いた。

スウは遊乃の方を向くと、質問を始めた。

「神菜さん、最初にケーキが怪しいと思つたのはあなたですよね？」

「え？ ええ。」

「なぜわかつたんです？ 被害者はその時、お茶も一緒に飲んでいたハズですよ？ なぜ、ケーキだけが怪しいと思つたんですか？」

「あの時、アリが落ちていたケーキにたかってたんです。そして、その中の何匹かが死んでいたのでそれで・・・ほ、本当です！！それにあのケーキだつてもらい物で、家元がご自分で箱から出したんですよ？ でも箱には送り状もついていませんでしたし、一体誰からの贈り物だつたのか・・・」

「警部、ケーキの送り主についての調べは？」

「ああ、現在調査中なんだが・・・」

中嶋は紙袋から複数の箱を出した。

中身はどれも例のケーキだ。

「見てくれ、このケーキ 자체そこの店でよく売つてる物なんだ。この通り、殺しに使われたのと同じ物が簡単に手に入つたよ。メーカーにも問い合わせてみたんだがね、製造段階で毒が混入する事なんてありえないって怒られたよ。わかっているのは、この前定例のお茶会が開かれて、その時大勢の客が贈り物をして行つたようなんだが、どうもその中の1人が置いて行つたようなんだ。」

「でも、ケーキは目立つよ。」

「そうなんです、皆さんほとんど和菓子を持って来てらつしゃいましたからね。でも家元は、和菓子よりケーキの方が好きだつたんですね。」

「周りには内緒にしてありましたけどね。お茶の先生なのにケーキが好きなんて恥ずかしいからって・・・」

「その事を知つてる人は？」

「まあ、我々3人くらいかな？ちょ、ちょっと待ってください。この3人の中に毒入りのケーキを贈った人物がいるって言うんですか！？」

「残念ながら、そう考えれば辻襷^{ツヅマ}が合うんだよ。」

「私と神菜さんはちがいます。一步間違えれば、死んでたのは私達のどちらかなんですよ！？」

「？」

「私と彼女も一緒にあのケーキを食べたんです！家元に言われてその場で箱を開け、ナイフを入れたんですよ！？」

「ちょ、ちょつと待つてくれ！って事は・・・一つのケーキを3つに分けて食べ、1人は死に2人は無事だった・・・どういう事だ！？そんな都合のいい事があるのか！？」

「でも、注射器を使えば・・・」

「何を言つてるんだ、家元の見てる前でそんな事できるか？」

「イヤ、待てよ・・・？もし仮に、犯人の狙いが家元じゃなかつたとしたら・・・？」

「もし仮に？犯人の狙いが家元じゃなかつたとしたら？犯人は村山さんか神菜さんを狙つていたとも考えられる！！候補者である村山さんと神菜さんが死ねば、当然別の人間が選ばれる！！」

「家元と村山さん、神菜さんの誰が死んでも得をする人物は七森さんだが、裏をかいて神菜さんだという可能性もある・・・」

「私じゃありません！私は村山さんに恨みなんか・・・」

「まだ犯人の狙いが村山さんだとは決まってませんよ？」

「ボロを出したな！？オマエは注射器を使って毒を注入して、家元と村山を殺すつもりだつたんだ！！」

「私じゃありません、信じてください！？」

「わからんぞ。オマエだって弟子の一人だ、後継者を狙つてたんじゃないのか！？」

「あなただつて候補の1人でしょ！？動機は充分じゃない！？オマケにケーキを食べていないのであなただけよ！？」

「バカ言え、オレは別に村山やオマエなんか・・・」

「2人の内どちらかが毒を！？」

「まあまあ、まだ何も決まつたワケじゃないんですから。問題は犯人がどうやって毒を盛つたのか・・・そして、狙いは本当に家元だつたのか・・・？」

その時、哀が突然苦しみ出した。

「うーぐつ・・・が！？ぐ、ぐ・・・苦しい。」

「朝霧君！毒入りケーキを食べたのか！？すぐ医者を呼ばんと・・・」

「警部、警部。朝霧君が食べたのは、さつき警部が買つて来たヤツです。毒入りはビールの中ですよ・・・」

「あ？」

「の、のどにつかえた・・・」

「バカヤロウ！…」

「もう！丸かじりなんかして。ちゃんとナイフで切り分けなさいよ。」

「そう言ひと篠子はケーキを分けようとナイフを持った。

「…」

スウは何か感じたのか、ビールの中のケーキを見に行つた。

「どうしたんだ？明日岡君。」

「イヤ・・・」

「行き詰まっちゃいましたね・・・」

「そうだ、家元はお花にとても詳しい人だつたんですよねー！？」

「え？ええ。」

「家元が村山さんに贈つた花つて、何だつたんですか！？」

「え？」

「イヤ、季節外れの花つて何なのかなつて思つて・・・」

「ええと、あれは確か・・・何だつけな？」

「ああ、あれなら・・・金蓋花キンセンカですよ。」

篠子は聞き終わると、スウに耳打ちした。

ヒソヒソ・・・

「どうしたんだ、一体！？」

「これで事件は解決したよ、警部！…」

「これで事件は解決したよ、警部。犯人の狙いはやはり家元だったんだ。そして……」

「ケーキには毒なんか入つてなかつた！！」

「！？」

スウ達は外に出ると、ケーキの箱を2箱台車に乗せて持つて来た。
「一体どういう事だ！？毒はケーキに入つてなかつたってのは！？」
「まあ慌てないでください。今から事件現場の再現をしてみましょ
う！！」

「一体何を始めようつていうんだ？」

「家元は毒入りのケーキを食べたせいで死んだんじゃないの！？」

「そうです、これは毒入りケーキによる殺人事件です。」

「何なんだ！？今、毒はケーキに入つてなかつたって言つたばかり

じやないか！？君の言つてる事はさつきから矛盾だらけだぞ！？」

「オレは間違つた事は言つてません。今からそれを実証しようつて
いうんです。ご協力を！これは事件で使用されたのと全く同じケー
キです。間違いありませんね？」

「は、はい。」

「これを3つに切ります。」

スウはケーキを3つに切り分けた。

「はい、3つに分けました。事件の時と同じです。そして3つに分
けられたケーキを食べ、家元は死に村山さんと神菜さんは無事だつ
た・・・警部、朝霧、青木。ケーキを食べて。」

「た、食べるのか？」

「大丈夫、トリカブトなんて入れてないから。」

「おいしいよ。」

「ウチも同じく。」

哀と雅子は普通にケーキを食べた。

中嶋も恐る恐るケーキを口に入れると、

「パク！」

ガシャア！！

「ゲホッ、ゲホッ。ど、毒が・・・毒が入つてた！？」

「！？」

「安心して、ワサビだよ。」

「何て事するんだ！？寿命が縮まつたよ！！」

「犯人と同じ手を使つたまでだよ、中嶋警部。」

「おい、オマエらのには入つてたか！？」

「入つてないよ。」

「ウチも同じく。」

「？」

「こついう事です。まずナイフのどちらかの刃に毒を塗り、毒を塗つた方の刃が必ず真ん中のケーキに触れるように切る。そつ、このように・・・」

「ユリ！」

スウはナイフの刃にワサビを塗ると、全員の前でやつて見せた。

「ザク！」

ケ

ケ

『毒』
包丁

ケ

『毒』
包丁

ケ ケ

包丁

ケ

「ひとつすれば、1つにだけ毒を盛る事が可能です。そうですよね？」

村山卓郎さん・・・！」

スウは村山を指差した・・・

「ちょ、ちょっと待つてくれ。何で私が？私は家元の後継者なんだぞ！？」

「それを証明してくれる人がいますか？」

「…」

「思つた通りだ。それはやはりあなたが一人で言つてるだけなんですね？」

「だ、だからって私が殺した事になるのか！？第一家元は私のために花の鉢植えまでくださったんだぞ！？」

「それです！その花が問題だつたんです。第一家元はあなたに贈つた花です。この花が証言してくれます！」

「いい加減にしろ！！花がしゃべるとでもいうのか！？」

「そう！花はしゃべるんです！！それを聞き取れなかつたのが致命的でしたね。花はこう言つています。あなたと家元はうまくいってなかつた。あなたは後継者にはなれない！・・・と。

「ど、どういう事だ・・・！？」

篤子は1冊の本を出した。

「花・・・言葉？」

「答えはそこにあります。」

パララ・・・

『金蓋花

花言葉

失望

別れの悲しみ

パサツ！

「家元さんはお花にとても詳しい方だつたそうですね？そういう人は贈る花に意味を込めるんですよ。あなたを後継者にするつもりなら、なぜこんな花言葉の花を贈つたんでしよう・・・？今の季節こ

の花を手に入れるのは非常に困難です。それなのになぜあえてこの花を選んだのか・・・他に説明のしようがありますか?」

「君の言つ通りだ。あの日、家元は私に桐沢流を出るよう言いに来たんだ。同じ茶道でも家元と私のやり方はどんどんちがつてきていた・・・でも、だからつて破門にするなんてヒドいじゃないか!私だってあんな事したくなかった。師匠を殺すなんて事、したくなかったんだ!!桐沢流の家元になるのは、私の・・・私の夢だつたんだ!!!」

「あーあ、今回は篠子が花言葉を覚えてなかつたらどうなつてたかな。」「でしょ?」

「花言葉か・・・全く人生いくつになつても勉強する事はあるわな。」

「げ!? 警部が花言葉! ?」

「似合わなーい!!」

「警部、警部。ピッタリの花があるよ。」

「おー! 何だ! ?」

『ボケ

花言葉

単純

『朝霧ーー!!』

『アハハハハ。』

哀を追つて行く中嶋と、それを呆れた目で見つめるスウ達。

そんな彼らを、1人の男が監視していた・・・
果たして、この男の正体は・・・!?

某国 某所

1人の女性が、大きな建物の前に立っていた。
彼女は扉を静かに開け、中に入る。

ギギィイイ・・・

中には、1人の老人が立っていた。

「ただ今戻りました、キング・ポセイドン。」

女性はキング・ポセイドンという老人に声をかける。

「ご苦労だった、クラーケン。して、調査の方はどうなった?」

「順調です。あの『明日岡スウ』と『浜谷篤子』が柏大学付属高校
に通っている事を突き止めましたわ。」

クラーケンと呼ばれた女性は、不敵な笑みを浮かべながら言つ。

「ククク、そうか。あの小僧と小娘め、やはりまだ仲間の仇を討つ
氣でいるのだろうな。我らに挑もうという事か。」

「無謀にも程がありますわね。私達『海王星』に逆らおうとは・・・
キング・ポセイドン、いかがいたしますか?」

クラーケンがキング・ポセイドンに尋ねた。

「ククク、今はまだ泳がせておけ。いざれ時がきしだい、返り討ち
にしてくれるわ・・・」

「その意気ですか、キング・ポセイドン。ところで、もう一つの調
査についてですが・・・」

「おお、調べ終わつたのか。で、どうであつた?」

「キング・ポセイドンの考察した通りでしたわ。『例の怪盗』は今、
2代目に当たる人物が役割を引き継いでいるようです。」

「ククク、やはりそうであつたか。で、通っている学校は突き止め
たのか?」

「ええ。どうやらあの2人と同じ学校に通つているようですね。」

「そうか。あの怪盗もいづれ、機会をみて始末をせねばな・・・ク

「ラーケン、引き続き調査を続行せよ。」

「わかりましたわ、キング・ポセイドン。それでは失礼いたします。」

「

クラーケンは、足早に歩いて行つた。

明日岡スウと浜谷篤子の宿敵、『海王星』。

果たして彼らは何者なのだろうか・・・!?

全てはまだ、謎に包まれている・・・

FILE40・消えたダイヤの謎『1』

おつす、みんな。

スウ
だ

今日はまた、オレや篤子が小学6年生だった頃に解決した事件の話をしてやる。

「...終わる」

一遊びに行こうや、スウ！」

「ちよこど、スサ、今田田舎でしょ!!!」

卷之三

תְּלִימָדָה

で、後よろしく。

「ちゅうとー、それとこれとは別でしょー! ?」

勘弁してくれ！今日はケーブルの発売日なんだよ！！！」

外文！！」

その時、担任の先生が走ってきて来た。

「三井」、「保安」、「渋谷」、「岡田」、「時田」

「どうしたのって、オマエら……今、職員室に警察の方が来てる

「アーナツ？」

「あ、あの・・・先生・・・それつてもしかして、図体のデカい目

つきの鋭い人？

「ああ、そうだ！自分の教え子が警察のお世話になるなんて・・・」

その時、担任の先生が走つて来た。

「・・・

「オオオオ・・・

「全く迷惑な話だよなー。連絡はポケベルにしてくれって言つてゐるのに。」

「そやけど、田直はサボれたやん。」

「そ、そんな。だつて、緊急の用事だつたんですよーー！」

「で？殺人課の刑事が出て来るつて事は、また殺人事件なワケ？」

「いや、今回はちょっとちがう。まあ、とにかく本人に会つてみてくれ。あ、見えて來たぞ。」

ピタッ！

パン！

「大きな家だな・・・」

『中嶋一葉・中嶋茂次の姉 中嶋総合病院院長』

「やあ！久しぶりね、明日岡君！」

「一葉さんー何で一葉さんがここにいるのー？」
一葉さんの家

！？

「ハハ、まさか。私はこの家の主治医をしてゐるのよ。それより・・・し、茂次！どうしてあなたがここにいるのー？」

「え？何でつて、オレも一応刑事だし。」

「私が呼んだのはあなたじやない！明日岡君よーーー！」

「何だよ、警視正に連絡とつてやつたんだぞーーー！」

「一葉さん、それより用件は何なの？」

「あ、そうだった。あなた達・・・天王州ダイヤモンドって知つて
るかしら？」

FILE 4-1・消えたダイヤの謎『2』

「天王州・・・ダイヤモンド?」

「天王州ダイヤモンドっていえば、日本中にチヨーン店を持つてる大型宝石店よ。今はもう日本の宝石業界をほぼ独占しちゃってるの。」

篠子が天王州ダイヤモンドについて説明する。

「そう、ここには天王州ダイヤの会長の屋敷よ。」

「で? その天王州ダイヤがどうかしたワケ?」

「知ってるかしら? 『聖女の瞳』という宝石を・・・天王州ダイヤが所有する、30カラットものダイヤモンドよ。世界と秘宝とまで言われていてね、少なく見積もつても時価・・・7億円! ! !」

「な、7億円! ?」

スウ達は驚いた。

「まさか、一葉さん・・・それが盗まれたとか言うんじゃないだろうね・・・」

「イ、イヤ、それが・・・わからないのよ。」

「わからない?」

「無くなつた事にはちがいないんだけど・・・それが・・・消えてしまつたのよ・・・皿の前から、パツとね・・・」

スウ達は天王州家応接室で、一葉が再生した防犯カメラのビデオテープを観ていた。

ザーッ・・・
ピッ!

『天王州雪麿 天王州ダイヤ社長』

「いよいよ4日後だな、聖女の瞳の一般公開！」

『川瀬永介 社長秘書』

「ええ、世界の秘宝と言われるくらいの代物ですからね。新聞やTVでも大評判ですよ。」

『天王州雪吉郎 天王州ダイヤ会長』

「フフ、そうでなくては困る。何せ我が社の華々しい世界進出の第1歩だからな。」

『天王州雪希 社長の1人娘』

「それはそうとおじい様。今でも身につけてらっしゃるんでしょう？」

「な、何をです！？」

「鈍いわねえ、聖女の瞳よ。」

「え、でも聖女の瞳は、いつも金庫の中に厳重に管理してゐるんだじゃ。」

・・?・

「それは二セ物ですよ、中嶋さん。」

「2つあるんだよ、聖女の瞳は。1つはガラス玉。そして今、私の内ポケットにあるのが本物だ。つまりガラス玉を金庫にしまってあるのさ、カモフラージュとしてな。そして本物はいつも私が持ち歩いていっているというワケさ。」

「その二セ物がよくできてるんだ。2つ並べられたら、簡単に見分けはできんな。」

「だが二セ物は所詮ガラス玉だ。落とせば割れるし、キズもつく。」

「でもズルいわ、おじい様だけ独り占めして。」

「ハハ、よろしいじやありませんか。」

「そうそう、今日は特別に見せてやるんだからな。よし川瀬、部屋のカギを調べてくれ。」

永介はドアや窓も閉まつてます。」

「OK、ドアも窓も閉まつてます。」

「ウム。」

「おじい様、早くして！」

「フフ、では始めるか。諸君！これが天王州ダイヤの宝、聖女の瞳だ！！」

キラキラキラキラ・・・

FILE42・消えたダイヤの謎『3』

「諸君！これが天王州ダイヤの宝、聖女の瞳だ！！！」
キラキラキラキラ……
「本当にキレイ……」
「イ、イヤア、流石30カラット。結構重い物なんですねえ……」
「ハハハ。手が震えますよ、中嶋先生。」
そう言つた永介も、ダイヤを落とした。
ポロッ！
「おっヒ……イヤア、すみません。中嶋先生の震えが移つてしまつたようです。」
「フーン、普段宝石を見飽きてる川窪でも震える事なんてあるのね。」
「フフ、聖女の瞳は特別だからな。仕方あるまい。お、川窪。すまんが水割りをもう一一杯作ってくれ！」
「はい。」
スツ！
ガチン！
カラカラ……
「ハハハ、まだ震えが残つてゐるのか。それはダイヤじゃないが。」
「ど、どうもすみません。」
「どうだ、気がすんだ雪希。」
「いいえ、まだよおじい様。虹色に光るんでしょ？聖女の瞳って。」
「どういう事です？」
「聖女の瞳は、ロウソクの火で見ると虹色に光るんだよ。」
「あの、じ覽になるんですか？」
「仕方あるまい。『イイツは言い出したら聞かんからな。』」
「わかりました。じゃあ、私がロウソクを取つて来ましょ。」
「ドキドキするわね。」

「イヤア、こんな貴重な物を見せていただけるなんて思ひませんで
したよ。」

バタン！

「さあ、いよいよ始めますよ。」

永介が電気を消す。

「さ、おじい様。」

雪吉郎はダイヤを口ウソクに近づけるが・・・

「？」

「何より、光らないじゃない！」

「いや、きっと火が弱いんだよ。」

「もつと火に近づければ……」

サツ
!

永介は口うそくに手を伸ばすが、手元が狂つた。

ガンツ！

「あつ！」

辺りが真っ暗になる。

「だ、誰か電気を・・・!..」

スッ！

「誰だ、何をする！？」

「どうしたんですね！？」

「明かりだ、明かりを点けろ！！」

ガシャアアアツ！！

۱۰

「な、何、今の音！？」

ガチッ！

な、何だ、グラスが割れた音か・・・

「うーん、あつた、会長？」

「ど、だ！？聖女の瞳はどこへ行つた！？」

プリン！

「・・・というワケだ・・・」

スウは頭をかく。

「身体検査はしましたか？」

「勿論だとも！それに部屋中探し回つたし・・・盗まれてからこの部屋を出た者は1人もいないんだ。それなのに・・・消えてしまった・・・」

「そうなんです、ついさっきまでここにあつたのに・・・消えてしまったんです。煙のように！――」

「ダイヤを消す方法は一つだけです。知っていますよね？燃えるんですよ、ダイヤつて。ダイヤは炭素の塊ですから、高熱にさらせば燃えて無くなっちゃいます。でも、ロウソクやライター程度の熱、じやビクともしませんよ。」

スウが篤子の片に手を置く。

ポンッ！

「そういう事！従つて・・・消えてなんかいないつて事です！――」

FILE 43・消えたダイヤの謎『4』

「スウ君。聖女の瞳は世界の秘宝と言われる貴重な物だ！この事が公表されれば、我が社の信用はもちろん、国際問題にまで発展しかねない。そういう理由で、我々は正式に警察に捜査を依頼するワケにはイカンのだ！つまり・・・我々は全ての願いを君に託す他ない！頼む、我が社を、イヤ世界の秘宝を救つてくれ！！」

「コク・・・

「どう、何か糸口はあります？」

トン！

「犯人は恐らく1人です。」

「ど、どうしてわかるんだね？」

「よく考えてください。聖女の瞳が盗まれた時、この部屋は密室・・・しかも真っ暗だったんですよ？仮に犯人に共犯者がいたとしても、外で待ってる共犯者にダイヤを渡したとすれば、その時外から光が入ってしまいます。しかしどうオにはそんなものは映つてなかつた！」

「ちょっと待つて、それじゃ・・・やっぱり犯人はこの中にいるって事じゃない！？」

「バカな。ここには監視カメラがついてるんだぞ？この部屋では重要な会議や商談が開かれるため、監視カメラが取り付けてある。その事はここにいる全員が知ってるんだ！」

「そうですよ。カメラの前で盗むなんて、そんなバカな事できますか？やっぱり消えてしまったんだ。そうとしか考えられない・・・」

「いいえ、物は消えたりしません。盗まれたんです。宝石ドロボウをする時一番苦労する事、それは・・・盗んだ宝石の処理です。売るにしろ形を変えるにしろ、専門的知識やルートがなければどうしようもない。しかし、天王州ダイヤの関係者ともなればそのぐらいの知識やルートはいくらもあるハズ。つまりあなた達なら、犯行

を成功させる可能性が非常に高いという事になります！！」

「でもだとしたら、ダイヤはどこへ行ったんだ！？盗まれてからこの部屋を出た者は誰一人・・・一葉君ー君、確かにさつき部屋を出たな。スウ達を迎えるために玄関まで！！」

「そ、そんな！部屋を出る前全員の身体検査をしたじゃないですか！でも見つからなかつた！！」

「しかしダイヤが盗まれたのは部屋が暗くなつた時だ。それ以降部屋を出たのは、君一人なんだぞ！？」

「待つてください、私じゃない！私は絶対ちがう！！」

「おじいさん、待つてくださいーまだ決め手になるようなものは何もありませんよ。」

FILE 43・消えたダイヤの謎』4』（後書き）

予告のページ

『名探偵・スウと篠子の事件簿』と、ある作品とのコラボ小説の執筆が決定！
『ある作品』の詳細については今後明らかになるよー。
続報を待て！！

FILE44・消えたダイヤの謎『5』

中嶋茂次はあれから、家中をくまなく探していた。

「ダメだ・・・やはり見つからん。」

「まさか・・・本当に消えたというのか？あの世界の秘宝が・・・！」

スウはさつきから、防犯カメラの映像を繰り返し観ている。

ピッ、ピッ！

「どうしたの、スウ？」

「引っかかるんだよ、どうも・・・」

「！？引っかかるつて、何が！？」

「それがわからねえんだよ。」

「おかしい、どう考へても変だわ！！」

「イヤ待てよ？犯人はダイヤを飲み込んだんじゃないのか！？」

「中嶋警部、30カラットってかなりあるのよ？飲み込めるワケないでしょ。」

「アホやなあ、中嶋警部は。」

「ちょっと、茂次！アタシに恥をかかせないでよ！..」

「川窪！水割りもう1杯作ってくれ！..」

カララン・・・

「お、スマンな。」

「・・・・..」

ダン！

「ど、どうしたって言うんだ？いきなり。」

「わかつたんです、犯人のトリックが・・・そして恐らく、ダイヤはもうこの部屋にはありません・・・」

「な、何だ！？」

「どういう事だ！？一体誰なんだ、犯人は！？」

「その前に皆さん・・・ボクが手品を見せてあげましょ。これは

トリックの説明です。」

スウはテーブルにあるピーナッツの皿をチラリと見る。

他の人達もつられて見た。

「 そここのピーナッツ・・・一つボクにくれません? 一葉が近づき、ピーナッツを一つ取つてスウに渡す。

「 ども! ところで・・・雪吉郎さん、ゴルフとか好きですか? 」

「 あ、ああ。好きだが? 」

「 それじゃ、ボクがこのピーナッツをボールに変えてプレゼントしましょう。 」

クルツ!

フツ!

「 うーん・・・はい! 」

スウが一連の動作をした後、彼の右手からボールが出て来た。
パツ!

「 ど、どうやったの! ? 」

「 簡単な事です。ボクが皿をチラリと見た時、みんなもつられて見ましたよね? その隙にここの中のボールを取り、息を吹きかけるフリをしてピーナッツを袖の中に落とす・・・そしてコッソリ右手に持ちかえれば、ボールに早変わりというワケです! 」

「 意味はわかるが、これが犯人とどうつながるんだ? 」

「 そつか! そういう事ね? 」

「 篤子も気づいたか。皆さんにお聞きしますが、もしボクが今の方法でこの2つのピーナッツをスリ替えたとしたら・・・ピーナッツがスリ替わった事に一体誰が気づくと思います? 1人もいないでしょう、恐らく。つまり・・・犯人は『聖女の瞳』をスリ替えたんですね! これと同じ手を使つてね! ! 」

FILE 45・消えたダイヤの謎『6』

「『聖女の瞳』のレプリカは本物ソックリだったんですね？それならスリ替えてもそう簡単にはバレません。」

「じゃあ、部屋が暗くなつたあの時に？」

「いいえ、この事件の犯人はもつと大胆な方法をとりました。そう、部屋がまだ明るい時、みんなの見てている前でスリ替えたんです！犯人は、ダイヤを袖の中に隠してたんです、ボクがピーナツツを隠したように。しかしダイヤも30カラットもあれば結構な重さだ。そんな重い物が袖の中にあるれば、当然動きは鈍くなる。犯人はすぐにでも、ダイヤを袖から出したかった。でもできなかつたんです、犯人はこの部屋にカメラがある事を知つてましたからね。」

「しかしそれはカメラの死角に入れば済む問題なのではないかね？」
「その通りです。でもできなかつたんです、犯人には！なぜならその人物は、カメラの前で水割りを作らねばならなかつたから。そして、その犯人は・・・川窪栄介さん、あなたです！！」

「な、何を言つてるんだ君は・・・証拠もなしにそんな事言つたつて・・・」

「証拠ですか？証拠は・・・」

スウは栄介に向かつて何かを投げる。

ブン！

バシ！

「それです。」

バツ！

「ピーナツツ？」

「違いますよ、証拠はピーナツツをキャッチしたこの手！今あなたはキャッチする際に右手を使つた。つまりあなたは右利きです。ところが・・・篤子！」

篤子はビデオのスイッチを入れた。

ピッ！

「これは聖女の瞳に触る前の場面です。やはりあなたは右利きですね？ところが聖女の瞳に触った後は急に左利きになつてます。でもそれは当然の事。なぜならその時、あなたは右袖にダイヤを隠してたからです。」

「ボクがビデオを見て感じた鈍さはこれだった。もしあなたが犯人でないなら、納得がいく説明してもらえますか？」

栄介はヒザをついた。

FILE 46・消えたダイヤの謎』7

「川窪、オマエが・・・」

「ダイヤをスリ替えたのは部屋が暗くなる前です。そして暗くなる前に部屋の外に出たのは、ロウソクを取りに出た川窪さんだけ！その時部屋の外に持ち出したんでしょう。」

「でもなぜ？なぜわざわざ部屋を暗くしたの？」

「部屋を暗くしたんは、雪希さんがロウソクの火で虹色に光る聖女の瞳を見たい言つたから。ガラス玉が虹色になんか光らんから、川窪さんは困つて二セ物を本物と思いこませたまま消してまおうとしたんや。」

「天王州ダイヤの信用に関わる一大事ですからね。川窪さんは当然、すぐには公表されない事を知つてたんです。」

「その間にダイヤを売りさばき、外国に逃亡する！！」

「それじゃあ、スリ替えた二セ物・・・あのガラス玉はどうに行つたんだ？」

「私達部屋中探したけど見つからなかつたわよ？」

「木は森の中に隠せ・・・この割れたグラスの中に二セ物のダイヤの破片が混じつてるハズです。今にして思えば川窪さん、あなたはワザとグラスと割つたんですね。そして雪吉郎さんの手から二セのダイヤを奪い取り、グラスと一緒に踏み碎いた。そうやって二セ物を本物と思いこませたまま消してしまおうとしたんでしょうが・・・。物は消えたりしないんですよ、絶対にね！！！」

「フフ、何もかもお見通しつてワケか・・・本物の『聖女の瞳』・・・。ロウソクを取りに出た時、台所に隠しておきましたよ。」

その後、スウ達は見つかったダイヤに魅入っていた。

FILE 47：可憐なメイド刑事・スウ！？『1』

スウと篠子は、捜査秘密課の一室に呼び出されていた。2人が一室の前に来ると、1人の女性が立っている。

「あれ？あなた・・・羅刹刑事部長？」

羅刹氷歌『警視庁捜査秘密課・刑事部長』

「久しぶり、スウ君！」

説明しよう。

彼女はオレと篠子の元上司で、刑事部長の羅刹氷歌さんだ。雪女と人間の間に生まれたハーフらしい。

確か今は、北海道警に勤めてるハズだが・・・

「でもどうしてここに？確か北海道警に移つてたんじゃ・・・」

「向こうの子達と折り合い悪くてさー。面倒くさいから戻つて来ちゃつた。」

「面倒くさいって・・・」

「それに、スウ君と篠子ちゃんにも会いたかったしね。どう？少しは進展したの？」

「キス程度はしました。ちなみに2人共階級は警視正と警視のままです。」

「まあ6年生の時点での階級だったしね。4〜5年くらいじゃまだ上がらないのも無理ないわ。」

スウ・篠子・氷歌の3人は、署長から指示を受けていた。

「というワケでだ、オマエ達3人には連続通り魔事件の捜査のため潜入捜査をしてもらう！」

「潜入捜査ですか？」

「ああ、犯人と思われる者がよく通っている店があるらしいってな。

場所は・・・喫茶店だ！！

「喫茶店・・・？」

で、その潜入先はつつづと・・・

メイド喫茶『HONEYE』^{八一}

「お帰りなさいませ、ご主人様！・・・で、何ですかこれは！？」

「似合つてるわよ、スウちゃん！」

そう、潜入先はメイド喫茶だつた。

つまり、今オレはメイドの格好をしている。

つけ毛やら胸パッドやら・・・

「何で潜入捜査でこんな格好をさせられなきやなんないんですか！」

「店員なら犯人に近づいても怪しまれないでしょ？」

「なら羅刹刑事部長もこの格好したらどうなんですか？」

「私はそんな事しなくても犯人に近づけるから。」

「諦めなさい、スウ。 羅刹刑事部長はもう上司。 上司の命令は絶対よ。」

「篤子まで・・・」

「うん！篤子ちゃんも似合つてるわよ。」

「オマエ接客とか苦手じゃなかつたか？」

「スウの辱めはアタシの辱めも同様。 アタシも頑張るわよ。」

オレ達は今、潜入捜査でこのメイド喫茶に来てる。

「お待たせしましたご主人様。」

「君新人？名前は？」

「・・・スウです。」

「スウちゃんかー。 設定はツンデレ？クーデレ？それとも妹？」

誓つて言つが、決して趣味じゃない！（女でもねえ！）

「頑張つてねー。」

「スウ！犯人捜しも忘れないでね。」

「・・・ああ。（・・・犯人も何でこんな所通つてんだか・・・おかげで、こんな目に・・・だがこれも、市民の安全を守るため！辛苦とも頑張る！…）」

次回も前途多難です！？

FILE 48・可憐なメイド刑事・スウ！？『2』

「（）」れも市民の安全と平和を守るため・・・辛くとも頑張る・・・（）

「・・・あれ？明日岡君ちやうづ？」

「ー？」

スウが振り向くと、そこには笠美達が立っていた。

「・・・待て、オマエら・・・何か勘違いしてるぞ？」

「明日岡君にこんな趣味があつたとは・・・」

「ここんト事件多かつたもんな・・・」

「安心しい、クラスメートには黙つとくさかい。」

「だから、違うと言つとろうが・・・」

「潜入捜査？」

「そう！容疑者が通つてる店らしくてな、こい。だからこいつして張り込んでんだよ。篠子も一緒にな。」

「大変なんですね、高校生刑事は。」

「でもわざわざ店員になる必要あるの？」

「色々あるんだよ、事情つづつもんが。つてかなぜオマエらこんな所に来たんだ？」

「好奇心や好奇心！話題作りにもなるしな！」

「せつかくだから何か頼みましょうか。」

「じゃあ、みんなでこの『巨大ラブリーケーキ』つての頼もか！」

「わかった、注文入れて来るわ。」

スウはキッチンに入つた。

「巨大ラブリーケーキ1つ入りました！」

「はいはい。」

キッチンのシェフは手際良くケーキを作つていぐ。

程なくして、ケーキは完成した。

スウはケーキを持って行く。

「巨大ラブリーケーキお待たせしました。じゃ、オレはこれで・・・

「待ちいや。ケーキに何か文字描いてえや。」

「は?」

意味がわかつていないスウ。

「ここに書いてあんて?『お好きなメイドに文字を描いてもらえます』ってな。」

「ハア!?

「さ、早よ描いてえや。」

「・・・かしこまりました。」

スウは赤いクリームでハートマークを作り、真ん中に『スウ』と描いた。

「おおきにな!」

「(テメエら・・・後で覚えてろよ・・・)」

スウは顔を紅くしながら、キッチンに戻つて行く。

すると、客の1人がコップを落として割つてしまつた。

「あつ・・・

「大丈夫ですかご主人様!」

スウは慌てて雑巾を持つて行き、拭き始める。

「すいません、ボクも手伝います!」

「大丈夫ですご主人様。破片がありますから危ないですよ

「あ、はい。」

「明日岡君、完全にメイドやん・・・」

「カワいいな、ああいう明日岡も・・・」

破片を片づけ、持つて行くスウ。

そんな彼を、先程の客が怪しい目で見つめていた・・・

次回、事件発生!?

スウはその後も密にマジメに応対していく、いつの間にか売れっ子になっていた。

「店長・・・これ、昨日の売り上げの7倍はいきますよ・・・」

「スウちゃん・・・正社員になつてもらおうかしら・・・」

そしてその日は大盛況の中に、閉店時間となつた。

「え？ 買い出しですか？」

「ええ、今日中に買う予定だつた食材を買うの忘れてて・・・」

「じゃあ、篠子。店長に付き添つてやつてくれ。」

「スウは？」

「オレは留守番してゐる。」

「大丈夫？」

「心配いりません。不審者が出来たら捕まえてやりますよー。」

「じゃあ、お願ひしようかしら・・・」

店長は篠子と一緒に、買い出しに出て行つた。

スウはテキパキと締まりをしていた。

「さてと・・・1階はできたな。店長と篠子が帰つて来るから、裏口は開けといで大丈夫かな？」

スウは2階に上がつて行く。

スウが2階に上がつた直後、店内に影が侵入した。

「フウ、これで戸締まりはできたな。さて、降りるか……」
その瞬間、スウの手がいきなり後ろに引っ張られた。

グイッ！

「？」

ガチャン！

「！！（手錠……！？）」

「静かにしな……」

スウの後ろに、いつの間にか影があった。

「（口イツ……唇間の客か！…）」

スウは1階に降ろされ、床に座られた。

両手は後ろに回されて手錠を掛けられ、口はガムテープで塞がれている。

「……（口イツ……まさか例の通り魔か？）」

「この店は良いな。こんなカワイイ娘が見つかるんだから。今までオレが手にかけたヤツらも、こここの客だつたからな……」

「（やはりか！）

「だがオマエはすぐに殺すのは惜しいな。オレがオマエを女にしてやるよ。オレにはオマエの本当の姿がわかるからな……」

男はスウに近づく。

「フ……ンガアアア！…」

ブツトイ！

何とスウは、自力で手錠を引きちぎってしまった。

「え！？」

ベリッ！

「テメエ……夢見んのも限度があんぞ！オレの本当の姿がわかつただあ！？そういう事は……」

「ヒイイツ！？」

スウは男を一本背負いで投げ飛ばした。

ノノシテ!!

「『國語』卷之三」

その後、連續通り魔はアツサリ逮捕された。

「お疲れ様、2人共。なかなか様になつてたわ、2人のメイド姿。」

「腰の腰筋がゆる懶り懶りジ」

「情けないの、たかが喫茶店の潜入捜査で。」

「最近の喫茶店はスゴいんだよ・・・」

はい もしもし？ 宮 畑 電話よ！ サイト喫茶から

「スウ君の」

「スウ君のメイトお姫さんには詰半良か『たみだいたいから』本格的にバイトしないかつて。あ、篠子ちゃんもついでにどうかつて。」

「アカウニード……アタシガ……?」

の言葉により篠子のプライドがキズついた

この言葉により篠子のプライドがキズついたのか、スウを道連れに本格的にメイド喫茶のバイトを始める事になったのは、ここだけの話・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8393a/>

名探偵・スゥと篠子の事件簿

2011年7月9日16時15分発行